

清國擾亂日記
全

三盟館發行

清國擾亂日記 美本

三盟館定期發兌
第一號

發兌雜誌概則

發行	每月一回	日
定價	一冊 拾錢 半ヶ年 五拾五錢 壹ヶ年 壹圓	
郵稅	貳錢	拾貳錢
合計	拾貳錢	六拾七錢
注文	前金	壹圓二十四錢
拂込	爲三ノ宮郵便取扱所	郵券代用
受取	證書は別に差出さず本誌を送るが其證あり	
廣告	五號活字二十四字詰一行五錢半頁二十四行壹圓拾錢全頁四十八行貳圓	
本館	一時に金五圓以上の(前金にても)御注文の方は館友証を渡し向ふ五ヶ年間特別割引(總て一割引豫約品は五分引)を呈すべし	
館友		

三 盟 館

七月三日付を以て我が皇帝陛下に致されたる

清帝の御親電

大清國大皇帝大日本大皇帝の誼を問ふ清國は貴國と相倚る唇齒淳朴にして嫌ひあし目前倭も使館書記害せざるの事あり惋惜し一面兎を捕へて懲罰するの間各國は人民教民を仇殺するに由り朝廷人民は扶けて教民を嫉むと疑ふを致し遂に太沽砲臺を攻占す茲に於て兵鋒遂に開き大局益々紛擾を現す因て思ふ中外の大勢は東西相併時して而して東方は方に我兩國其間に支持するのみ彼の雄を西土に唱し虎視耽々たるもの其意を注ぐ豈獨り清國のみかや万一清國支へされは恐らく貴國も亦獨立し難からん彼此休戚相關す速に應に小嫌を措き共に全局を維持すべし現存清國は兵を籌り匪を禦き應接違わらず難を排し紛を解くは唯同洲惟れ倚らざるを得ず是か爲め賊を閉き脅を布き純切に意を致す只望むらくは大皇帝法を設けて籌維し牛耳を執りて以て事局を挽回せん事を併せて希ふ徳澤を惠示せられんとを徹切録金の至りに絶わす

光緒二十六年六月七日

七月十三日付を以て清皇帝陛下に致されたる

我が皇帝の御復電

大日本大皇帝大清國大皇帝に復す杉山書記生被殺の事は前に已に傳聞せしも未だ確報の信すへきものを得ざりし頃此電に接し初めて其事の確實あるを知り稍々悲歎に深し爾來北方の團匪日に益々猖獗暴動亂暴至らざる處かし現に北京に駐劄する各國公使及び館員等は其總團攻撃を蒙ると並に聞く某國の使臣已に擊殺せられ而して貴國派する處の官兵は使臣を救護すること能はず又匪徒を彈壓する能はずと殊に知らざる公法言へるあり外交官の身は尊くして犯すへかざるの威あり若し苟くも使臣の身に稍々冒失を加ふるわらは已に公法に進ふ況んや之れを殺害するに於てをや此時に當りて貴國政府若し果して實方匪徒を救護せず餘事は辨するに易かるへし是

序

清國義和團の起るや列國相互共に兵を進めて自國臣民の安全を保たんとせしむ清政府の野心以て諸列國と干戈を交ゆるの止を得ざる場合に至り遂に支ゆる能はず清帝愛親覺羅氏は皇貴一族を従へ西方に幸行し二百有餘年の基礎亦以て跡を止めず茲に至り我が列國聯合軍は八月十四十五の兩日を以て全く北都を占領し一時北京の反抗も其の局を結びたり然れ共列國の意見區々に出で事は刻一刻と難極に至り向後如何ある現象を湧出するやも計り難しよし媾和あり事落着に至るとも亦以て清廷の一大改革の根原たるあり何れにあらずも發端義和團の峰起小事熟知する蓋し無用の事に非ざるあり然り而して一方我兵勇が列強諸國と相併肩以て絶大の偉業を捧したる事實に至りては豫め覺知すると雖も亦以て團匪の宿望清政府の意志及び我將士苦戰の狀一々確知する者少し余輩茲に不盡の筆を勞し順序日を追て事變の大小を不漏に記し派遣兵勇を稱讚すると共に擴く義俠勇猛なる同胞の爲め一小冊子となし發行する以所なり

明治三十三年九月二十八日

編輯者識す

れ即ち大皇帝の目下中外に對し常に蓋すべきの責にして斷して躊躇すへかたす去月より以來各國大兵を天津に派遣し日本亦兵勇を該地に調派せざるを得ず是れ專ら團匪を彈壓し使臣を救護する爲めに見を起すに係る豈並に他意あり是れを以て貴國政府若し克く早きを趁えて各國使臣等を圍繞の裡より救出せば則ち貴國政府各國と交を開くを願はざるの樂を見るに足り貴國の禍端自ら應に顯彰すへし日本政府は貴國政府と素より睦誼を厚うす若し一に緊要ある時あらずは日本又敢て其勞を致すを辭せざるへし因て貴國政府敏速に勉めて彈壓を爲し以て救護の實效を顯せば他日各國と商議の際日本は自ら正に中に據り力を出し貴國の利益を擁護すへし茲に特に專電に對し謹んで復す惟ふ大皇帝之を鑑みよ

明治三十三年七月十三日

清國擾亂日記

發端

北清事變愈々益々激甚を加へ今日にては單に匪徒の猖獗に止まらずして支那政府彌反抗の舉に出で白河の河口に水雷を敷設し各國兵の上陸を拒絶せんとしたれば列國軍艦も不得已協同一致遂に太沽砲臺を砲撃し開戦六時間の長きに亘り遂に之を陥落したり之にて北清地方の局面は一轉回し支那政府は暗に戰宜以て文明諸國を相手にして雌雄を決する時節とはあり願ふに支那官民の頑愚なる恰も我日本が四十年前攘夷の策を建しと同じく列夷は悉く斥攘すべしと思惟したるより今回の事變を引起したる以所あり抑々種子は昨秋冬の候に初めて朱江鎧を首領となし山東省地方に峰起し暴動を極め遂に禹城平原荏平觀城の諸所を根據地とし勢力益益加はり耶穌教徒を苦しめ列人の迷憾甚だし依て英佛獨伊の各國公使は之の平定を清政府に申込みたり彼れは申譯的征伐を爲たり然れども遂に團匪の爲めに敗れ取り却て義和團の熾勢を來らしむるに至り日は一日と

清國擾亂日記

勢力を加へ巡撫毓朗に至るまで團匪を義民團と稱揚するに及び彼等をして「保清滅洋」の旗を押し立て紅色の布を巻き紫衣を着け青龍刀を提げ直隸省附近へ蔓延し遂に四百餘州の擾亂を來らしめ端緒茲に發したるあり依て日を追て記さんに

五月二十八日

午前蘆漢鐵道の長辛店驛外二個所を燒拂ひ附近數里間の線路及び電信線を破壊し佛國人一名負傷せしむ此の變に諸外國は兵を北京に進めんとすの風説あり之れより先き團匪は瓊瑤河(ロカン線)砲臺(京津線)及び球水縣を騷したり此の時に當り我愛宕艦は直に水兵上陸の準備を爲したり

五月二十九日

我愛宕艦よりは今朝士官七名水兵二十二名北京進軍の途天津に上陸す尙米國水兵百名(砲二門)を率ひて夜る天津に上陸す英國は急に軍艦二隻を威海衛より太沽に派遣す

五月三十日

列國は今夜水兵入京の事を決定す

六月一日

午後三時英佛露の水兵七十五名米國兵五十二名及び伊國四十名は天津に上陸し日本兵に合し直ちに北京に入る獨逸國水兵五十名は翌二日に入京せり

六月二日

清兵は聶士成の部下にて盧臺にある三營(一營五百人)の兵は天津居留地(租界)の外を警備し董福祥は鐵道線の南を神機營は其の北手を夫々守備す其の時分涿州方面危し

六月三日

夜に至り黃村驛の線路破壊せられコサツク兵卅三人遭難者搜索中楊柳青團匪の驟來に接し三名重傷を受け鐵道不通となる義和團は團間館を焼くべしと主張す當地警備嚴重なり居留民の人意を強かすしめたるは我軍艦笠置(噸數四、九八〇二等巡洋艦)が五日を以て太沽に着したる事ありし

六月四日

笠置艦水兵六十一人上陸し其の内三十三人は天津に止まり二十八人は北京に入れり

六月九日

團匪は天津附近へ來押せしを以て聶士成の軍隊引揚を爲す通州を燒かれ鐵路總辦趙舒邇が解散の説諭を爲し董福祥宋慶及び馬玉崑等出兵等實に騷動一方ありし

六月十日

テイローに於て耶蘇教徒義和團と闘ひ匪徒百餘名殺さる

六月十一日

露佛兵千七百人英兵四百八十人餘(砲三門)は我笠置の士官一人水兵三十八人天津に入り其他獨逸兵五百二十人佛六十五人露二十一(砲五門)皆天津に上陸す聶士成は列國兵の入京に不平を起し海防上盧臺に引揚げ此の日我須磨艦は太沽に着し陽炎艦も少し遅れ太沽に着し塘沽太沽間の交通の任に當り須磨の水兵七十人上陸せり

六月五日

太沽碇泊軍艦は英國五隻外に驅逐艇二隻伊國一佛國三露四外に驅逐艇二日本二米一埃一獨一等あり

六月六日

北京天津間の交通五日に止まり本日列車を通過せんとせしも能はずコイナ停車場燬かる英國兵六百天津に入る清國民人心洶々たりコイナは天津北京鐵道の天津の北倉驛より三番目の停車場なり天津は不相人心安からず而て二百有餘の列國水兵上陸し太沽には列國軍艦碇泊せり各國は團匪の勢力益々猖獗あるを以て上陸兵を増加しつゝあり我笠置よりも兵員上陸の準備中あり

六月七日

暴徒は楊村附近迄來る

六月八日

夜る天津城内の教會堂燒かれたり
楊村防の鐵道は團匪の爲め正午より四時迄に破壊せられ軍艦に供給する糧食列車は進む能はずして午後九時引寄せり

午前十時天津電信局燒かれ電信不通流言百出す

此の日に當り雲南に匪徒起り居留人は立退きに準備し楊子江には英艦に備うる爲め劉張二總督防禦の運動に取いかより劉は尙は一萬の兵を陸路北京へ送れとの命に接す

午後三時の事あり我が公使館附書記生杉山氏は入京兵出迎に行く途中永定門外にて董福祥の馬隊に襲れ裸体とあし刀を以て氏を殺し逆埋せり

又入京途に在る各國兵義和團と衝突し五十人を殺し十餘名を擒にし團匪鐵道線路を破壊し電柱を倒せり

我軍艦須磨より士官五名水兵七十一名上陸し天津に入る此須磨より上陸する者前後合すれば二百〇五人内北京に向ふ者五十二人あり露兵一千七百四十六人馬匹二百七十七頭砲二十四門上陸す露國兵一千餘名を載せて太沽に着す

香港守備の英兵千餘名太沽に着す
列國軍隊千五百有餘は北京に向ひて天津を出發せり此日雲南の匪徒起り勢益々猖獗なり尙ほ楊村附近の鐵橋壞れ各國兵入京を中斷す

六月十二日

西山放火 西山ある英國公使の別荘其他各別荘皆焼かる北京騒擾す

此の西山は北京の西北二里餘の地に造らるる小山脈にして此處に多くの寺院殿堂を設け各國公使及び其の館員は毎年夏季中其他の寺院を借切りて避暑するを例とせり

故に英公使の別荘と云へるは同公使が借受け居たる寺院の事あるべし

放火の聲言 天津の停車場附近に匪徒多数集合し停車場を焼かんと聲言す

天津の停車場は白河の東岸にありて天津居留地佛租界の地と相對せり故に居留地内匪徒横行し天津居留地の危險設想に堪へたり

六月十三日

獨逸公使本日總理衙門に赴く途中砲撃に逢ひ負傷し衙門に達して死す

多数の義和團匪は早朝來楊村方面より直隸總督衙門に接近せる鐵橋を渡りて天津市に混入し來れり該團徒は

は直隸總督の命にあらざれば進退決する能はず若し今夜事あらば必ず總督の命ありと思へど決答し暗に開戦の宣言をせり

六月十六日

太沽碇泊中の各國軍艦中先任艦の現在せる露國旗艦ラシーヤ號に列國海軍指揮官を會し何か決議する處ありたり

前夜來團匪居留地外ある教會堂五箇所に放火し漸く居留地に迫り且停車場を襲はんとす露兵之を擊退す午前六時我兵白河南岸居留地通路を警備す正午露兵交代す午後六時我兵(須磨陸戰隊)露兵に代りて同所を警備す同八時過匪徒數百人各炬火を手にして我哨兵線に迫り一齊射撃數回を加ふ匪徒火を捨てて散走す是より以後匪徒三々五々屢來り窺ふ擊て之を走らす最も哨兵線に近き射殺せられたるものを見るに年齢二十四五絹衣を纏ひモーゼル彈藥包と金貨數個を有せり

六月十七日

太沽砲臺と列國軍艦(米國を除く)との間に午後二時より戰闘開始せられたり豊橋艦は直に太沽に引還す砲撃

赤色の帽子を頂ぎ同色の綬帶上衣及び縮縮したる袴を着け二十人乃至三十人聯合し群集の中に抜劍を揮つて市街を横行す然れども地方官吏は恬然として之を黙過し何等鎮壓の手段を採らず、外國人居留地は匪徒の襲撃に備へんが爲め嚴重に防禦せられり事態益々危殆にして容易きざるの状あり

六月十四日

須磨艦は六月十一日着口し水兵七十一名士官五名は十二日午後六時天津に到着せり

六月十五日

今朝五時頃上海天津間の電線を切斷し爲めに不通とある各國兵は清兵と義和團に狭まれ進退極まれり當今の形勢戰宣の命令下らざるも殆んど開戦の有様あり

我豊橋艦より上陸したる兵は英獨の陸兵と共に塘沽の停車場を準備す
午後一時聯合陸戰隊司令官は書を直隸總督に送り塘沽砲臺の引渡しを要求し翌午前二時迄に決答を求め尙清國要塞司令官に面會し午后〇時迄に塘沽砲臺引渡し尙砲臺にある軍隊を立退せしめんとを申込たるも司令官

は十七日八時を以て停止せり之れより先白河の川口に於ては水雷を敷設し各國兵の上陸を拒たるより各國軍艦中先任軍艦ある露國艦隊の旗艦は清兵に向ひ日を期して水雷撤去を要求し若し期限内に撤去せざれば砲臺を砲撃すべしと談判したるも清兵は撤去を肯せざりしより此に砲火始りしありと云ふ此日の縱隊を記さんには午前四時砲臺に向ひしは第一番に露國兵二百名獨逸兵百八十名英國兵二百名日本兵八百六十名にして隊後不平の色ありしも團練に臨むや列國兵に先立第一堅固ある砲臺を占領せり先登者は白石大尉にして列國軍人は舌を巻けり服部(雄吉)中佐の流丸に當り死せしは實に此時あり中佐は大丈夫と叫び笑て死す時に清國政府は之が爲め各國に和議を申込故に太沽北岸砲臺には日本國旗一は英國旗を揚げ南岸砲臺は露佛兩國の國旗を揚げたり

六月十八日

太沽砲臺と列國聯合艦隊との砲戦は遂に艦隊勝利とあり砲臺陥落し支那人死亡者多し各艦故障なし午前七時清兵再び砲撃を始め力を集めて北方を襲ふ尙河の南岸

に沿ふて進み來り我兵防戦す 偶敵兵對岸の鹽置場の
陰より狙撃し中隊長菅文三前額を射られて戦死す露兵
河を渡り正面の敵に向ふ英獨並我兵之に續ぐ初め正金
銀行に合營せし我兵之に向ふや福田少尉英兵と共に敵
を撃攘して進む敵の砲火は主として居留地内著しき建
物を目標とせしもの如く本館の隣ゴールドンホールの
附近を目標とし爆弾の聲喧しかりし
又本館の構内に爆裂せしものも多し須磨の一小隊三井
物産會社の側面即ち河岸居留地より天津市街に通ずる
地を警め他の一小隊は佛租界ある東正金銀行前面を警
戒す笠置の小隊は領事館を守護し併せて梁園門の警備
に充つ

正金銀行に在し兵員爆弾の爲重傷一名輕傷二名又シー
モア隊は本日安定に達せし時支那軍は太沽陥落の報
到りしものと見ゆ大舉して聯合軍に當り勢頗る猛烈
りき聯合軍奮闘し敵兵四百を斃したるも最早進む能は
ず且戦ひ且卻たり

六月十九日

太沽砲臺より北方敗走せし清兵は迂回して天津方面に

迫るの形跡を示す而も敢て迫り來り市街を砲撃す

六月二十一日

天津は團匪に圍まれ十七日以來激烈なる砲撃を受け實
に危し太沽に有る聯合軍の一部は進軍中かれども到底
進路困難にして目下太沽を守備する事必要あり
列國が北京に入るは同胞を救はんが爲めに義和團及
び列強に反抗するもののみ砲撃する事を各地總督及び
地方官に告知せり尙又上海にありては日本義勇兵を組
織し銃五十挺を着せり米國も又同様あり
本日午前六時過對岸武備學堂附近に在る敵機に退却す
地物に據りて背後に備ふるもの如し數回の射撃を聞
く正午過に舊位に復す形勢前日に同じ

六月二十二日

佛國海兵二個大隊及び二個砲兵隊は來る二十四日前後
(ツローン)港を出發する報に接す
天津に於ける列國官民は紫竹林の一所に集り列國兵之
を防禦す

列國兵天津を砲圍す團匪及清兵は只遠くより砲撃する
のみ列國兵の之れが爲め死傷するもの頗る多く外國人

至り團匪と合し天津の攻撃に加はりたり此の役に英國
士官一名殺され一名傷き二名の水兵負傷せり露兵も又
死傷多し
又敵兵河の左岸に沿ふて迫り來り居留地を砲撃するこ
と前日に同じ午前正金銀行榴彈の爲に燒失居留地砲臺
今尙砲火絶せず

六月二十日

列國聯合軍指揮官(シーモア中將)は歸着せり百五十
名の外國人は天津に於て殺害せられたり七千の軍隊は
太沽に有り清國兵全日四十斤砲を以て天津を攻撃し米
領事館を破壊せり
尙清兵四十斤砲を以て居留地を砲撃せり
太沽に於ける列國聯合軍は天津に前進し砲撃を開始し
盛に繼續しつゝあり

前日來居留地内飛彈絶えず午前五時領事館前の胸壁を
築造中之に従事せし居留民牧庫一郎銃傷を頭部に受け
即死同池田善藏は重傷を受く朝、武光少尉警備區を防
備中左股に銃傷を受く但し輕傷、午前笠置水兵一名梁
園門附近の敵を防禦中輕傷せり清兵四方より居留地に

居留地燒拂はれたり又米國兵百三十名露國兵百名天津
へ向け太沽を出發せり

又支那兵一千名は芝罘に着し直に陣營を張り西側の砲
臺大砲四門を増加し故に太沽より獨露兵三千進軍す實
に上海の如きは恐慌を極め巨商閉店避難し反引中止せ
り

尙形勢依然彼我の配備舊の如し砲銃の聲絶えず露國コ
サツク偵察兵の報により歐兵二千乃至三千天津を距る
十六哩の地に鐵道線路に沿ふて前進し來るを知る
英國公使より同國領事に達せし密使により去十九日總
理衙門より各國公使に通牒し二十四時間に北京を引拂
ふべき旨請求せし

本日一の武庫を襲ひ之に據るシーモア中將が密使を
天津ある聯合軍に送りて救援を請ひしは其前日あり斯
くて守る事三日間天津の救援軍來るに會し之と力を合
して天津に退却す

天津を守りしは第二聯合軍にして停車場を守護せしは
露兵あり我兵は前報の外須磨陸戰隊にて下士以下五名
負傷我軍艦笠置陸戰隊は下士以下二名戦死負傷五名居

留民牧庫一即亦其日彈丸に中りて即死し池田善作外一名重傷す

六月二十三日

同盟軍二千天津を救ひたり英米先頭として進軍し露兵死傷三十五人と云ふ總指揮官シーモア中將の行衛明かあらず爰に露軍は聯合總指揮官を撰定するの要を感ず故に露國艦隊司令官東部西伯利亞總督たる海軍將官アレキシーフ氏を太沽北京間聯合軍及び太沽艦隊司令官に撰び同氏は本日旅順を出發せり

六月二十四日

天津に於て獨露の兵等は敵兵の爲めに中斷せられ露兵の如きは死傷百八十名に及べり
露士成は太沽砲臺を回復すべしと命令せられたり
シーモア中將は天津の北九哩の地を據守しつゝありしが遂に敵の圍む所とありて氏の兵六十二名殺され二十四名負傷す
眞夜中に露兵一千日本及英米獨伊の兵約一千(此分は

に引揚げ來直に海光寺の機器局の後手を焼拂ひたり

六月二十六日

天津救援隊は敵の抵抗に會せしも應援を得少時戦へり鏡江に土匪起り依て聯合軍千五百名の兵を之が鏡撫として太沽より派遣せらる
我が後發兵本日人馬無事太沽に着す
本日激戦の後遂に機器局を占領せり
聯合兵は其後見事に目的を達して午前十時先づ天津に引揚げたり

六月二十七日

我第二派遣隊を搭載せる土佐丸も朝太沽に入れり
米國軍艦ヨークタウンは太沽に來れり
露國軍艦ドントリドンスコイは旅順より陸兵千五百餘を載せ本日太沽に入港す露國の總兵員は今日までにて七千五百餘人あらん
本日午後より義和團匪は又々天津へ盛返し砲撃を開始せり聯合軍も茲に至り攻撃に準備を爲し敵情偵察の爲め斥候兵を出す事に定む

六月二十八日

英艦アラクリチ(艦長指揮)は武備學堂前の浮橋を渡りシーモア中將の率ゐる聯合軍が北七哩の地に優勢なる支那兵に支へられ居りしを援けんとて前進し日本兵は野村指揮官福崎小隊長等の率ゐる笠置の四十八名(須磨の擔架士六十二名)ありし露兵は鐵道の南側(右)他は北側(左)を二縱列に進めり

六月二十五日

我先發隊は風波の爲め上陸後漸く午後七時に太沽に着せり清國兵塘沽に近き來らんとす
午前〇時露兵一千英米獨伊及び我兵約一千居留地の南部武備學堂前に架設せし浮橋を渡り土壁に沿ふて前進アドミラル、シーモアの率ゐる聯合軍北方七哩の地に至り優勢ある清兵に支へられ對陣せるを救援の爲に發進せり我兵は指揮官野村大尉小隊長福崎少尉境野少軍醫笠置の兵員四十八名須磨の擔架士三名よりある露兵は鐵道線路の右側他列國兵は左側と進行し二縱列とあり進む英米獨並に我兵は英のアラクリチ艦長之を指揮す
聯合軍はシーモア部隊を援けて之を護衛しつゝ天津

早朝斥候兵騎兵を出して敵情を偵察したるに北洋機器局の右翼に優勢の敵あるを認めたり依りて騎兵約六百を左方對面に出し野砲六門機關砲三門を前面鐵道の壘下に備へて敵を牽制せんとし午前七時過より開戦せしが機器局の左翼に在りし敵兵は盛んに露兵に射撃を加へ同時に局内壘上に備へ付けたる大砲を放ち茲に愈いよ劇戦とされり此の時獨逸兵は已に敵の左翼に進み居りて露兵と力を合せ敵の左方を衝き英米及我兵も此狀況を見出兵援せしが正午頃露兵は敵の中央正面に迫り壘を越えて局内に突貫し獨兵亦左方より進撃して敵の營内に入り之を占領したり同時に同處の火藥庫破裂す我兵の同地に到着せし時は現に露兵の占領後數箇所火藥庫及武器庫等に火を放ち之を燒燬せり此日敵の死傷敵十名露兵の死傷二十名許りにして太沽砲臺占領後の大戦ありき

六月二十九日

北京天津間鐵道全部太沽鐵道九哩破壞され聯合軍は都落に火を放てハーフラー號の兵士負傷する者の多し
フエーム號艦長太沽より十二哩上りて砲臺を燒たり英

國訓練の清兵は目覺し其效を著せり
是より先き日本兵九百名天津に到着し當地領事館の隣
ある長翅の住所を以て營所にあてたり
天津以南凡そ十哩の鐵道破壊せられ日本兵約十名英
兵等鐵道修繕に従事す
死者の遺骨を本日須磨艦に搭載せり

六月二十日

清國皇帝は李鴻章に再度に於ける兵勇の募集を命ぜり
聯合軍は本日より天津城の清國兵を攻撃開始し實に午
前七時より午後一時に至る六時間の劇戦に涉り清兵陷
落退却せり
又歩兵八百二十騎兵六(指揮は少佐某)前進せり福島少
將も視察の爲近日出發の筈

七月一日

福崎枝隊は英露國將官の提議に同意し正午敵軍を偵察
する事とせし露兵は河の南岸(居留地の方)南岸より天
津城東北にある砲壘邊迄日本兵は同佛兵防禦線の前市
街の橋跡迄とし彈藥庫を破壊する目的を有し英兵は日
本兵左翼正方を機器局を偵察す

昨夜露の少將より使者副官福島司令官の許に來り日本
砲兵を停車場に出し呉れと請求す我軍は砲兵を派遣し
歩兵に掩護せしめ露の守備兵交代す此の時日本兵の戦
死するもの數十人ありし今朝は英佛兵も其守備に加は
る筈あり

太田歩兵大尉の戦死も此の時あり

七月二日

馬玉崑の軍天津城附近に來りしより戰鬪刻々夜々相繼
けり
馬玉崑の兵は(十營或は七營)三營(三營)皆白河の左岸停車
場の前方に位置し大砲六七門を有せるが如く列國聯合
軍に取りて第一の強敵あり又天津城内には城壁上に四
五營の官兵擡槍等を備へて守備す其の地は悉く義和團
を以て充ざる故に我聯合軍の守備地に於て尤も危険の
地位は停車場の方面ありとす而して停車場は露兵守備
する所ありしが二日の戰鬪我兵代りて砲戦し一旦敵砲
を沈黙せしめたり依て露國指揮官は我軍の勞を謝し同
時聯合軍の指揮官會議に提議する所種々有りたり
茲に於て列國指揮官相議し危険の地を日英佛の三國の

此の時に日本兵は由比大尉の一中隊にて五時間市街戦
を演じて偵察の目的を達し午後五時には佛兵の防禦線
内に引上げ此役兵卒の戦死一名重傷二名輕傷三名其勇
進猛進の狀は列國兵を驚しめたり
シーモア中將の舍營地へ列國指揮官會同して天津攻
撃の軍議を開く

七月二日

昨日より引續き軍事會議す
總攻撃準備の爲め獨露兵は河の左岸(對岸)に運動し天
津城を攻撃して露兵と一致す心組あり敵の兵力は一
萬有餘あり馬玉崑の手勢(一萬人)も加はり押し寄せ來
たり
此夜露兵の方面に當り銃聲散々聞ゆ
午後四時より日本歩兵隊が居留地の南方土牆に沿ひて
防禦線を張る事にせり其前に我舍營地にて砲彈破裂し
騒々時丸砲第十二聯隊中隊長小南歩兵大尉銃傷を受け
て遂に歿す其後天津の我領事館は敵兵に破壊さる
敵兵は露兵の幕營地と天津居留地を砲撃すと云ふ依て
總攻撃は一時中止の姿あり

兵にて之を守備する事に決す其兵數を左の如く定たり
日本軍二小隊(約百四十人)
英國軍 百人
佛國軍 百人
露兵と正午の頃面白き一戦ありたり義和團の一隊天津
城の南門を出で遠く土壁の外を廻りて居留地の東南
方に向はんとするが如き形勢あり其鎗隊は約七八十人
にして隊伍を組み立て旗三四流を押立て揚々として土
壁を隔つる約二千五百米突の處を側面行進し來りしか
ば土壁上に備へたる英砲臺より之を砲撃し當初榴彈を
放つ時迄は泰然として行進せるが三四發の榴彈が恰
も其隊伍の上にて破裂し其中の十四五名を倒せしかば
流石の剛勇も右往左往に散亂し約一時計にして再び南
門に引返せり午後一時半頃より約三千人南門を出て機
器局を經先發に來り一隊の向ひし方面に行進し來りし
が是亦英砲兵の爲妨げられ退却せり

七月四日

午前八時三國兵は露兵と交代してより七時間を經て午
后三時頃前方にありし敵兵盛に停車場を砲撃し雷鳴と
大雨を利用して義和團匪と官兵と交へ我守備線近く肉

薄し來り就中約五百の敵兵は停車場の東北方約三百米
突の地點にある獨立家屋の附近に達し夜間に至る迄固
守して動かざりき三國の守備兵は佛兵を中央とし日本
兵其左翼に備へ英兵其の右翼に當れり
初め敵軍の嫌に停車場を攻撃し砲火の射撃刻一刻猛烈
を加へ来るや英國は一中隊とポチキス機關砲一門佛國
は一中隊の援兵を送り出し日本も亦守備兵よりは援兵
の請求をかりしも萬一を豫防する爲め日根野大尉(周
造氏)の一中隊を午後六時の頃増遣したり敵兵も三國
の強固なる抵抗に辟易せしと見ゆ夜陰を利用して退却
し獨立家屋の附近に達せる約五百の敵兵のみ今朝に至
りて漸く退却せり此役英兵三名負傷し佛は大尉一名即
死小隊長一名負傷し他四五名の負傷あり我日本軍は五
名の負傷者を出し内二名は重傷あり敵の死傷算をし
我日本軍の此戦に與りしは武久大尉(三保三郎)の指揮
せる二箇中隊にて大尉を始め全隊の兵士が勇戦の狀は
列國人の共に驚嘆敬畏する所とある
各方面の戰鬪に於ける實験に據れば敵兵の常に前鋒に
在るものは義和團匪にして官兵は常に其後に從ひて進

み來るが如しと云ふ實に現時敵兵の意外に強固なるは
義和團匪の在るが爲にして聯合軍に對して攻撃の決心
を有せる者は義和團匪のみの如し且敵軍は如何に強固
ある抵抗を爲す共東機器局(北洋)は列國兵に燒拂れ西
機器局(海光寺)も亦列國兵に燒拂はれ而して西詰に於
ける武庫も北京救援隊の背進途中に於て端なく其の占
領する所とありたり
七月五日
昨夜來我停車場守備隊に肉薄し來りし敵拂曉前一旦退
却せしが午前四時頃より我が守備隊に向ひて猛烈なる
砲撃を加へしかば白河右岸に土壘して屯在せし英國砲
兵は之と對戦し盛に砲火を交へしが午前十時に至り双
方共に砲火を中止せり其後天津より蘆臺と通する運河
上に於て正午頃より新に十七個圓形天幕と二十五個方
形天幕とを發見せり
七月六日
本朝に至り敵は復停車場守備隊に向ひ強硬なる攻撃を
初めたり大砲を増加し六門ともし交戦數刻砲火を交へ
しのみにて中止せり

時頃に至り二中隊の兵を應援し増派す其他強固なる戰
鬪ありて一旦引揚げ七日再び砲撃を加ふる事と定む
七月七日
正午十二時を以て露英兵は前日の方面に向て午後四時
迄砲撃を加へたり此の役に我が騎兵上等兵一名腕に負
傷し他の上等兵一名は義和團匪の槍に足を突かれたり
七月八日
午前五時より敵兵居留地を砲撃す
午前九時西機器局并に同地南約二千八百米突にある八
里臺附近に新に二門の砲を備へ砲撃を初め正午に至り
て漸く敵を撃攘し了れり
我陸軍の砲十二門英國十二斤砲四門ロッキン速射砲一
門印度兵の有する野砲四門佛國東京の山砲三門を以て
應戦す
英國軍艦テンプルの四、七半(十二珊)砲四門を据付中
なり

シイモア氏宿舎に於て列國指揮官會議を開き我福島
司令官も又臨席し支那兵我聯合軍を侮蔑する如き情勢
あれば聯合軍は一打撃を加ふるの必要あり幸に日本軍の
多數到着したれば天津城及び就中天津城と白河との間
義和團匪窟と聞ゆる市街を砲撃せんと決議し午後二
時我砲兵二箇中隊リクリエション、グラント即ち天津
遊劇場に英國砲兵と土壘の間に放列す亦佛國砲兵は山
砲六門を以て佛租界ある白河の右岸上に放列を敷き總
督衙門の方向に向ひメリニット弾を以て砲撃せり
敵は天津城の東南角及び西北方二角二門の砲を備へ我
砲兵と對戦せしが一時間を経ざるに全く敵砲を沈黙せ
しめたり此の戦四時頃に終り午後六時より多數の支那
兵天津城より西機器局の方面に前進せるを見たり午後
六時過より敵第一に二千に近き兵を以て佛兵の防禦線
に迫り又千五百餘の敵兵は佛兵の前哨線に迫りしも露
國兵の之を攻撃せるあり
此の夜敵停車場我が守備隊に向ひ突撃を試み勢頗る
危殆に陥りしかば杉浦少佐は第十一中隊を引率し應援
に赴きたり敵は猶三方より包圍して進む故再び同夜二

午後日、英、米聯合軍を以て南西の村落及遊馬場に在る
敵並に圍徒を一掃し西機器局を攻撃一掃するの議を決
す

黒手城村の戦に中隊長を喪ひ即夜非難す此の時江口大隊長は甲辭を述べ尙ほ兵士に向ひ種々の談話を爲し爲に其の言に激勵せられ一百五十餘の將士皆激昂し甲ひ合戦を爲さんとす時に偶々停車場は敵の夜襲を蒙り苦戦奮闘を以て之を撃退し隊自らも又非常の損害を受けたるは同隊の爲めに悲むべく又悦べし此の日西機器局を攻撃せる後は遠近砲聲を聞かず

七月九日

午前二時聯合軍の集合運動を始め我陸兵千三百、砲六門、英兵及笠置、高砂の各一小隊にして總指揮官の率ゆる百四十九名と米兵六百名と共に時機を計り土壁外郭に沿ふて機器局に近き側面より突進することを約せり我陸兵は梁園門を出で左翼となり英兵を右翼に回し附近村落の拳匪を一掃し競馬場にある敵兵を攻め砲四門を奪ひ競馬場を略取し西機器局に突入し米兵及陸兵續々闖入し清兵に對し猛火を加へ尙ほ日英の野砲を以て南門附近の民家並に城内を砲撃す故機器局を保護すべきや否やに關し日英の將官に於て協議ありて各二百名を出し之を持続するの議定まりしも同處の建物悉く破壊

し一として屋蓋を有するものなく兵を入るゝ場所なく爲めに之れを捨つるに決し附近の家屋を焚き其兵を引揚ぐ

七月十日

一發の彈丸を放つ事なく敵は我が陣地の被る難を覺り支那人慣用の策略を爲し我が守備隊を怠らしめんと爲す耳

七月十一日

午前二時頃より静ありし敵營俄に動き三時頃より我停車場守備地及び東機器局に於る露兵の幕營地を猛烈なる攻撃を加へり敵は一時勇勢に見ゆるも我が河内山小隊長及び湯地中隊長の應援隊等に依り難易し遂に敗走してシドロに潰走せり此時に武久中隊長死せり我軍隊は同胞の惨死に憤激し塵殺せずんば置かず敵兵見掛け一散に突進せり不幸なる哉此の時塗塗の側面に突進せし敵兵未だ退却せざりし爲め我兵背後を見掛け射撃す我兵は今や敵の衝中に陥りたり早速壘内に引上りて再應戦はんと橋本少尉(省三氏)の一少隊を敵の側面射撃を爲しめ隊伍を立直さんとす内正面の敵砲聲を亂

發し敵彈に斃るゝ者數十人中隊長代理河内山中尉、寺倉少尉(孫二)及び山下特務曹長は即死し小隊長橋本少尉第七中隊の小隊長大城少尉負傷し中隊中全く將校を失ひ下士代りて之を指揮せざるを得ざるの有様となれるも固より死を決したる全隊おれば僅々二百に足らざる少兵を以て大兵の敵に當り六時間の長さ苦戦に涉り敵兵を撃退し隊伍肅々壘内に引上り實に列國兵は日本兵は勝つ可からざる地に立ち勝を取る者ありと其の武勇を稱讚せり此の日佛兵死傷六十餘名英兵の負傷二十餘名我が兵死傷七十餘名内大尉以下即死十餘名以て本日の激戦の状を推知すべし列國も自守方面に向ひ戦へり午後九時四十五分に至り英國を除くの外悉く露の幕營地に集合し淀河の架橋に進軍せんとせしも架橋材料運搬に困難ありて空しく散歸するに至れり

七月十二日

早天敵非常の決心を以て停車場の守備地に突撃し來り我聯合軍は慘酷なる損害を蒙りたれば總攻撃の事必要

を感ずるに至れり我第五師團後發隊も日々來着し我が日本軍勢力増加し福嶋司令官幕僚と共に總攻撃方策を案す時恰も佛軍參謀長意を受け方策を持ち來り徒に無益の戦を爲すより總攻撃の必要を感ずり列國指揮官必又同一の意見あり其作計書案は左の如し

- 露兵獨兵若干と佛兵一中隊と共に淀川に沿ひて陣せる敵左側を攻撃し水師營附近の砲壘に迫るべし日英佛米の四國兵は西南より天津城の南門に迫るべし
- 此の總攻撃の爲に出す列國の兵力を左の如く定めり
- 露國 歩兵千六百人 騎兵五百人 砲十六門
- 日本 歩兵二箇中隊 山砲一中隊 砲六門
- 英國 歩兵五百人 山砲四門 マキナム砲四門
- 獨逸 歩兵二百五十人
- 佛國 山砲一中隊
- 米國 歩兵五百人

此日一清人鐵道線路より白旗を振り來り之を捕ふるに在北京西公使より天津領事に致すべき書を齎せり其要に曰く六月二十九日北京發にて北京の急且夕に迫ると有り衆皆公使已下生死如何を氣遣ひ只だ情況の未だ進んで之を救援するの時機に達せざるを怨むのみ此日歩兵第十一聯隊の二大隊は天津に着す

七月十三日

午前四時半本隊は既に粟谷聯隊長の號令に隨ひ聯隊旗を押し立て西機器局正門(海光門)に達せしに同局には敵兵なかりしも門前小流れの橋を落されて渡るに由しなく暫時休止せしが我が工兵隊が更に架設し終ると直に進みて海光門に入れり敵は城上より頻りに砲撃し彈雨の如し英佛等は機に後れて至らざりければ豫定の軍列を正す能はず率先我砲兵をして放列を敷かしめ亦服部少佐の率ゆる一個大隊をして南門に向ひて砲撃を始めたり

各列國隊も續々相應じて盛に天津城を砲撃す午前七時突撃隊を作り南門に突進せんとせし敵は此所先途と彈丸雨沫するに依り粟谷聯隊長は其兵を二分し江口村山両少佐に指揮せしめ城門近く攻め寄せたり互に勇氣を鼓し猛進せしも城上の敵兵は頑強抵抗し射撃盛なりけるより遂に意を果さず午後九時頃に至り不得止退却し此の時服部少佐(尙)及び副官中村中尉は砲弾に吉澤中隊長は銃丸當りて即死し熊谷石井某二通譯官も亦負傷し其他即死負傷する者多し

七月十四日

明治三十三年七月十四日東天朝曦を孕んで曉將に鳴かんとする時に工兵隊架橋の準備をなさんが爲め小壕の邊に到り見れば意外にも橋梁は焼かれずして依然たり乃ら其旨を粟谷聯隊長に通じ進んで城門に至らんとす城上の敵兵之を知り射撃して之を退けんとせるも毫も屈せずして進軍し直ちに棉花藥二十五キロを城門の外扉下に裝し來りて之を爆發せしめれば其響を合圖として突貫々々の聲全軍に轟き渡り我第十一聯隊の諸兵先を争うて門内に突入し直ちに城内に打ち入らんとせしに案外にも南門は樹形にて内外二重の門をなし工兵隊は其の外門を破りたるも内門は未だ破るに達せず而かも先頭の各隊は内外二門の間に期集し壁の上り瓦礫を投せられ銃彈を放たれ後ろよりは後殿の諸隊陸續推し掛け一時は進退谷まれるよと見なければ機敏の我兵士は賢くも直ちに其内城壁に沿ひたる建物の破壊せるものを足場と爲し夫れより壁に把せ上れり壁上の敵兵は之を擠さんとして瓦石を投するものあるも決死の兵士の争でか之に屈すべき相争うて壁上に上れ

り小島中隊の軍曹に藤井房一氏あり壁に抓して壁上に達し敵狼狽の間に乘じて難なく門内に下り鎗を切りて門を開けば待ち受けたる小島中隊長(益三郎)西村特務曹長等は手兵を麾きて突進し直ちに壁上に駆け上り居残れる敵兵を追散らして其携へたる日章旗を南門樓上に掲げしむ之を此日の先登第一とす

- 此の戦に聯合軍の死傷六百人
- 天津城破門の勇士の出身左の如し
 - 井上 少尉 山口縣阿武郡
 - 今井 軍曹 廣島縣尾の道市十四日市
 - 高森 二等卒 山口縣三田尻
 - 宮地 一等卒 備後御調郡大濱村
 - 佐藤 二等卒 岡山縣淺口郡里見村
 - 水越 二等卒 備後世羅郡廣定村
 - 少尉從卒萬西仙太郎君は尾の道市尾崎町
 - 井沼田 一等卒 石見國爾摩郡馬路村
 - 福田 二等卒 山口縣佐波郡中關村

七月十五日

去る六月十九日北京を發し聯合軍に投じたる密使の言に依れば各國は支那を分割するものと認め到底公使等を保護するの責めに任ずる能はざるを以て二十四時間以内に北京を退去せん事を請求せり之に對し各國公使

等は在天津領事は各國とも斯る要求をすの權利ありれば衙門の言ふ所甚だ解し難しとの旨を回答し同時に慶親王、端郡王等に面會せん事を求めたり然るに返事なし故に獨逸公使は單身衙門に行かんと主張し通譯官コルデスを伴ひ行さしに途中にて支那兵に殺されたるあり

清廷は神機營及虎神營兵に拾萬兩を賜はれ武衛軍は飛に四萬兩を受け復六萬兩を加賞せり

救助哀願の密詔 西太后は義に劉坤一に密詔を下し日英、米、露の四箇國へ國書を呈し國內亂民起り財を奪ひ人を殺し公使館に災を及ぼし公力盡さて之を鎮むるに由かし願くは協力救助せられんことをとの意を傳へんとす其國書は劉坤一より各國駐在の公使に送りて傳達を託したり

戦後の天津

天津城の陥落するや内外死屍路に狼藉し南門の高樓全く焼け落ち市中の各處火煙高く上れり唯我の規律嚴肅ある秋毫も犯す所なく民人の私物財寶一も掠むる所なく婦女の家に匿るものは皆放ちて門を出でしめ又壯

丁の如きも確然たる證據あるにあらざるよりは敢て一人として之を殺すことなし是に於て城内の民人争うて雞豚酒肉を擲りて日章を得て順民たふんとするもの巷街相接す

此役第十一聯隊のみにて二百五十五人の死傷者あり他諸隊を合すれば三百人以上に上る而して他三國兵の死傷者も亦太甚だ多し是れ誠に近來稀有の劇戦たり我邦少からざる損害を受けたりと雖も其勇猛敢爲如何なる危険をも辭せざるの一事に至りては俄に列強國人の前に試験し批判せられたる也

七月十六日

聯合軍各國司令官は塘沽天津間鐵道及び電信管理を露國に委託する事に決せり

七月十七日

天津落城後官兵走り義和團は散じ頗る平穩にして最早銃砲の聲を聞かず只楊村に少數の支那兵ありと聞く我軍は軍規嚴肅毫も犯す所無く最も土人の保護に努む故に土人我軍を徳とし其保護の下に立たんと希ふもの甚だ多し

臺の後を襲ぐは遠からざるべしと春木大尉は語れり清廷は媾和を各國公使に申込み故は機器局を奪はれたるあり

七月十九日

去十三日天津に於ける歩兵第十二聯隊の服部少佐(尙同聯隊第十二中隊長吉澤大尉(正治)中村第一大隊副官(喜三)同第七中隊國枝少尉(熊雄)特務曹長西岡重助、同竹下一成戦死の公報本日ありたり

七月二十日

團匪を鎮壓する爲南京附近より送られし一萬六千の訓練兵は榮祿に結合せず蕪福祥の軍隊と去る四日天津を距る二十五哩の處にて出遭ひ相合して天津を攻撃せり而して殘餘の支那兵も團匪に合體せり又在天津列國聯合軍は北京前進に關する軍議中ありしが愈日本軍を主力として前進する事に決定し北進の計畫も既に確定したる旨我司令官より其筋に報告ありたり尤も前進期日は未定あるも第五師團の全部が今月中上陸結了の豫定あるに照合すれば今後甚く延引する事は無かるべし

七月二十一日

天津現今無政府あり故に日英露より一名宛出し假政府を設け政事を執ることせり我邦より青木中佐、英國よりダラトル中佐、露國よりオーダク大佐此任に當る

浙江省に於て十四日より暴動起り衢州府占領せられ知府殺されたり續きて十七日金華占領せられ浙江省城の電信局燒かる暴民は團匪にあらず榮匪にして侮れざる勢あり

七月十八日

我が總指揮官は製鐵所及槍砲廠處を巡覽す張之洞は武器彈藥の缺乏を憂ひ槍砲廠處に火急に製作を命せしよしあるが實際今日の需用を充すこと難かるべしとの説あるが右下命の事は事實如何にやと思はる目下當地に在る外國軍艦は例の英國軍艦一隻と本艦のみ此他長江筋にも目下の處英艦の外他國の軍艦あらずと語れり安慶にては巡撫王之春を訪ひ尋で布政司をも訪問せり王は兩眼炯々驅幹肥大如何にも一見偉人の如く言語動作英雄らしきも胸中一定見なく野心満々たりと見受けし併し彼は榮祿に取入り居れば或は兩江制

清兵は各國公使館を攻め獨逸人十名殺され十二名負傷す各公使館共に大損害を加へられ支那兵は六七時間にして攻撃を中止せり各公使館は援兵を要する事急あり據地利、伊太利、和蘭、白耳義、佛蘭西の各公使館破壊せられ佛蘭西公使館は今尙防禦しつつあり

七月二十一日

日本公使館より第二回報告に曰く昨日來の戦に際し戦死者總計十八名何時再攻撃に遭ふや知れず日本公使館内食物六日分あるのみあり我赤十字社病院船弘濟丸は横濱出發太沽に向ふ

七月二十三日

北京公使館は日佛兩館を燒かれたり軍人には死傷のれども他の居留人は大抵無事あり現在北京城内に在る清兵は董福祥の部下若干と少數の義和團匪とのみ通州には天津落城後退却したる義和團匪魁張得世在り北京より天津までの間には蔡村に大約千五百の官兵と五百の馬隊あり又楊村には大約一萬五千餘の官兵あるのみ其他は至つて平穩あり

七月二十四日

本日は何れの兵とも別に戦闘ありしを聞かず
只だチ、ハル附近に暴徒一揆起るの報に接せり
此日四川總督は外人保護を表示せる宣言を發布す

七月二十五日

露國偵察隊は北倉に派遣せられたる五千人以上より尙ほ少
かざる敵國兵に出會せり然れども聯合軍の救援隊
至り遂に之を撃退せり
本日清國皇帝より米佛兩大統領に對して今日の時局
を救済せられんことを求め又獨逸皇帝に對しては逆民ケ
ントラル公使を殺害せるの不幸を惋惜し嚴に懲辦せし
むる事を誓言す

七月二十六日

今日天津を距る北方十里の所に向ひ斥候隊を派せられ
たり程なく進軍始めらるべし然れども將官等が日一日
と進軍を延ばしつゝあるは痛歎の至りなり其の原因は
北京への進軍が英軍の爲に徒に遷延せられたりとは他
列國軍隊の將校等の言ふ所悉く相一致せり英軍は印度
のボーイパイバ等(少年吹笛者)が天津に練り歩く外は

一の運動も爲す所なし
日露兩軍は今早朝八千の清兵を北倉より撃退したり
大石橋の東北より露兵攻撃を受け反撃して東方の敵を
破りしも北方の敵は尙ほ熾に戦ふたり

七月二十七日

此日獨國皇帝は清國皇帝の御親電に對し返電を送られ
たりと承る尙亦米國大統領は或條件の下に仲裁の勞を
取るべき旨清國に通告せり

戦後天津の近状

白塘口附近に於て我兵と露兵との間に射撃を交換せし
も全く彼我識別の困難あるより誤解を生ぜしまでに
直に互に打解け少しも心配無し
露軍は歩騎聯合の偵察隊を北倉の方向に出したるに同
所の南方に於て支那兵と衝突せり其數五千あり別に英
露より得たる情報に據れば北倉の附近に於て白河に舟
を沈めたる事確かあるが如し提柳青附近には敵無し唐
店仔より姚在開團匪約一千あれども憂ふるに足らず小
站にも敵兵無し青木中佐輕傷最早勤務差支無し

七月二十八日

發許り糧食は尙六日位を支ふ北京城内に在る支那兵
は約三十營に若干の神機營を混せり援軍の到着二週間
以内にあらずれば恐らく當地は支へ難からん安藤大尉
兗島外交官補外六名重傷其他輕傷者三十名は皆軍務に
服す外國人の死者六十名あり

七月三十日

聯合軍の偵察に據れば清兵及び團匪は楊村の彼岸に數
箇の砲壘を築き約十三三營を以て之を守備し聯合軍の
前進を防禦せんとするものゝ如し天津の敗兵中士成
下の兵六七營は北京に入り團匪と合したるが如し
我軍は獨立の運動を以て攻襲偵察を唐家灣附近に向つ
て出すこととされり是より先き露國一たび此攻襲偵察
を出したるも其目的を達せずして空しく引返せりさて
其任務に當りし部隊は歩兵第四十二聯隊の全部(内一
箇中隊缺く)と之に砲騎兵各一箇中隊及び工兵一箇小
隊とにして渡邊聯隊長之を統率し別に歩兵第四十二聯
隊(内一箇中隊を缺く)聯隊長小原中佐は豫備として其
後方に從へり其先發隊は第一大隊と他の騎兵の一部と
にして第一大隊長堀江少佐之を率ひ天津城の北營門を

漢州(?)崇慶及び温江の各地に於て暴徒起り宣教師を
襲撃し凡そ百名の羅馬教信徒たる清國人を劫掠し其所
有品を暴奪したり尤も暴徒は成都より派遣せられたる
兵隊の爲に鎮撫に歸したり壁山にも亦騷擾起り佛國人
藥劑師一名襲撃に遭たり又佛國兵は蒙自を占領したり
直隸總督及海關道は去る十三日天津に於ける戰役中に
斃れたりと稱せらるゝ士成の後任として直隸總督に
任命せられたる呂本元將軍の部下に屬する多數の兵員
を有せり天津海關道運使及び天津知縣は青縣に退却
し大兵を以て嚴重に防守せり天津練軍は外國兵の進軍
を防止するの目的を以て北倉に於て砲壘を築き溝渠を
穿てり

七月二十九日

北京に於ては各國公使館は六月十三日より全く圍まる
二十日より十數營の支那兵より毎日晝夜間斷無く砲撃
せらる各國公使館を結び附たる線を以て防禦線とす柴
中佐は日本兵伊國兵の全部(露)佛獨兵の若干を以て肅
親王府の防禦に任す今や僅かに該府の半を保つ我兵武
器を取るもの水兵十二義勇兵十四彈藥は尙各人二十五

出發したるは午前三時頃にてありき夫より此部隊は西沽、丁字沽等の諸村落を經道を北京街道に沿ふて前進し第三大隊と他の一部とは田邊少佐之を率ゐる白河の左岸に沿ひ第二大隊と他の一部とは杉岡少佐之を率ゐる西沽より他の部隊と分岐して火藥庫方面に向ひ前進せり然るに午前五時過ぎ先發の騎兵は唐河灣附近に於て敵と遭遇し互に射撃すると數時の後之を撃退せり會他の歩兵の一隊も到着し茲に兩隊勢を揃へて更に敵を追窮するると爲したるに敵は悉く白河の兩岸に據りて家屋防禦を爲し頑固に抵抗せり又火藥庫方面に向ひし一隊も火藥庫附近に於て若干の敵あるを認め之を撃退して其の目的を達せり然るに此の敵兵は何時の間にか我が本隊の右翼に廻り唐河灣より白河の左岸に展開せり此日の戰鬪にて最も激烈ありしは午前六時七時の間にして敵は主力を白河の右岸あるシンチワンといふ村落の森林に集め之より河を隔て一齊射撃を爲したり我第四中隊は此時河を渡りて突撃せんとするの意あるも附近に橋梁なければ渡ると能はず而して敵は我兵の徒渉する能はざるを知り益烈しく射撃を加へたり當時第四

中隊の一部は尖兵とあり近きは敵と六十米突の距離まで接近し別に砲兵は陣地を約八百六十米突一敵を距ることの處に布き山砲四門を以て烈しく應戦し午前十時全く敵兵撃退の目的を達して天津城に引揚げたり此日敵の数は約三千許偵察の結果國匪にあらず官兵たることを確め銃器は皆な小口徑の連發銃にして無烟火藥を使用し彈丸の如きも其の外部をニッケルにて包圍しある精良品ありしと此の日敵の死傷は知るべからざるも我の死傷は下士以下四名負傷二十六名馬一頭あり

七月三十一日

清皇の親書、清國皇帝が露國皇帝に再び贈られし書は左の如しと云ふ天津一帶は戰場とされるも他の通商港にては貴國商人を保護する様督撫に命じ彼等力を竭せり獨逸公使の外北京駐在各國公使は安全あり只黑龍江吉林地方貴國と境す該地將軍フラン一帶の亂民鐵道工夫と結び事を起し貴國技師等夜に乗ヒタイリオ附近に逃る故に各營に命じ護衛して國境を出し又黑龍江地方にては兩國兵衝突互に死傷ありしを奏上せり要するに將軍の職務邊疆を守るに在りて政府は邊疆に於て

非を起すを好まず將軍には境を越えて戦ふべからずと命せられ天津の事前の國書に言へる如し紛擾の爲め兩國和を破る互に交誼を厚ふしたし陰曆二十八日附劉坤一への上諭に各公使平安無事食物給與保護す各國領事に謀り大局を治せりとあり北京救援軍の斥候兵は數日前に天津を發し其主隊は本日天津を發したり尙又牛莊、熊丘城等にて清兵は露兵と戰闘せし清兵は朱慶及盛京將軍増祺の各部下にて彼等は團匪と通じ先づ鐵道を破壊し露兵を掃除し中華の地を清めんと聲言せり

八月一日

天津を距る十里にして北京街道に在るタブラデイエスより避難し來る者の報道に諸處の耶穌教堂を防禦し居たる者一萬人清國官兵の殲殺する所とされりと云ふ北京より來れる一個の使に由りて、北京に在りし外國人等がターター、シナイ(内城)ある新天主教大會堂に集まれりとの報確められぬ、右の外悉く破壊し盡されて一物も遺す所なしと報せり亦他の齋々せる報道に據れば清人中に異議者起りて分

裂せりと云ひ又抗敵(外人攻撃)は中止せられ而して列國公使に向ひて談判開始せられたりと云ふ北京にては支那兵天津陥落の報を開き各國公使館を砲撃し各國兵の死者六十名負傷者六十三人を出せり各國兵の守備に堪ふるもの三百七十名に過ぎず

八月二日

公使天津護送の上諭八月二日發布詔勅左の如し八日(我八月二日)諭旨を奉じ、前に人民教徒と事を滋事に由り兵端を醸成す各使臣は京に在り將に之を保護すべし迭に總理衙門より書を致して之を應問するを経たり、并に京城未だ靖かず防護到り難きを以て兵を發し天津に護送して暫く避け以て驚恐を免かれん事を商議し即ち榮祿に命じ豫め妥實の文武大員を派し有力の隊伍を隨帶せしむ該使臣の期日を定むるを待つて京を出でしむ、沿途護送するの際倘し匪徒の窺伺して槍掠し事を尋ぬるあはば則ち剿撃して毫も沮阻あるを得ず、該使臣未だ京を出でざる以前若し本國に通信するものは只明電に係るものは即ち總理衙門より速かに

辨じて毫も遅延する無からしめ以て坦懐相共にするの意を示す

四日諸種の諜報に據れば聶士成の戦死せりとは確實あり、目下李秉衡は聶士成の率ゐし殘兵及南京に於て募りし兵を率ゐる宋慶、馬玉崑の率ゐる兵と共に北倉附近に築設したる防禦陣地に在り又董福祥の兵南下して此等諸將に合したるものゝ如く其兵數は二萬を下らざるべし

呂將軍の二十營南方より楊柳青に來り糧食掠奪中あり聯合軍の北京前進に就ての戰團序列及び後方勤務の計畫方法も軍議會に於て決定し居れば準備完成の上は前進運動を起すべし天津の敗兵再び北倉、唐家灣各地に集合し防禦の姿勢を取り居るを以て先づ是等の清兵團匪を擧擯するの後にあらざれば北京前進の運動を起すに至らずと陸軍當局者は語れり

八月三日

北京よりの報道達す其の意に曰く、各國公使館中燬かれざる所の館員は皆其館に在り日本公使も日本公使館に在り各國の婦女子は英國公使館に

北京城の各門外は義和團之を守備し城壁上には官兵あり

城内外の商家は悉く戸を鎖し唯日用品を賣買するのみ各公使館にては今日こそは援軍來るべしと日々言ひ續け一縷の希望を恃み將に絶んとする命脈を繋ぎ居れり城の内外に白蓮教徒起れり舊は永定門附近の飯店を以て本據とせしも今は二千内外の教徒あり天子を弑し官吏を殺して帝位官職を兼奪せんとする主義にて其候補名簿を作り居りしが地方官に捕へられて七十名殺されたり此教徒は九月に至りて事を擧げんとし人心更に洶洶たり又同匪は天子及高官の紙製肖像を造り菜市巷に之を斬り棄てたり北堂には天主教徒避難し佛伊兩國の兵四十名にて保護し居りしが二十三四の兩日義和團之を攻撃したり又通州の東南三十五里ある張家屯(?)及び蔡村の東二十五里あるターク屯も天主教徒の集り居る處あるが二十六七日頃義和團之を襲撃する筈あり天津に残れる聯合軍六千人、大砲十四門を有す西南に敵一萬五千ありて大砲を有せり

避難し居れり

獨逸兵は城壁の東部を燬米二國兵は其西部壁上を守備す、同所に備へある砲は天主教徒を先鋒として各國軍が城壁上の敵砲を奪ひ來れるものあり十七日より休戦となり當日西太后より三四百の西瓜を贈り來れるも其後は食物を贈らず目下彼我尙は對陣中にて警戒を怠らず董福祥は外國兵より買物の依頼を受けたる兵二名を慘殺せり二十四日の上諭は裕祿宋慶の上奏を容れ袁世凱李秉衡及登州海軍鎮臺の兵を以て白河(??)を回復し太沽天津間の水路に在る小蒸氣船を奪ひ通路を斷ち天津を占領し外國人を掃蕩すべき事を命せらるるとあり、外國人保護區域内に在る清國人三千人あり英國公使館にては館内の周圍に深二丈、幅三尺の坑を穿ち敵の遠方より地雷火を裝置せざるかを監視し居れり佛國公使館は此地雷火に由りて破壊せられたるあり外國人は目下黒麥と馬肉とを食ひつゝあり尙は二箇月の糧食あり勞動せざる者は皆粥を啜りて命を維ぎ居れり

計畫あるも諸種の偵察報告に據れば清廷は直隸省各地は勿論南方各地よりも多數の軍隊を北京に召集するのみならず天津方面にも三四十營の軍隊と數千の團匪集

合し來り聯合軍の前進を防止せん爲各所に防禦工事を施し居れば現時天津に在る聯合軍の兵員のみにては此等の清兵團匪を掃蕩するに多數の日子を費し大目的たる北京に進入するの期自然延延すべきに付來る十日迄には英米兩國の陸兵到着する豫定あれば其到着を待ち一帯沿道の清兵團匪を掃蕩し一氣呵成北京に進入するの勝るに若かずとの議聯合軍議會に於て決定し余は北京前進の準備を兼ね英米軍の到着を待ち居る次第に付五萬有餘の聯合軍が北京に向つて前進運動を起すは來る十四五日頃あるべしと

八月四日

本日李鴻章は領事等に向ひ巖に劉張と共に南滿防禦の事を約せし以來前約を履みて内外人の生命財産を保護せんとす脚等疑ふ勿れと照會したり許景澄袁昶兩人の處刑は殘酷を極めたる趣きにて剛毅李秉衡等が反對者に見せしめの爲宮闕午門前に於て西

太后の許可を得て腹を裂きたるもの、如し是は清朝初世に行はれし以來今日まで絶ゆる居たる極刑あり然るに軍機處は處刑果て、後之を聞きたるよし榮祿と剛毅は互に自衛を主とし相往來せし榮祿慶親王等謁見の際には端王必ず傍に在り如何とも爲す能はず端王の命是れ從ひ政務紊亂すと漢字新聞に云へり當地外國人等は同情を表して李鴻章に對する不評判も日々減する如し李鴻章は熈和全權大臣の任命を披露せん爲に道臺をして各國領事を訪問せしめたり

八月五日

在天津日英露等の聯合軍は北倉に在る清兵を掃蕩せんが爲前進し本日午前三時より砲撃を初めしに清兵頑強に抵抗し激戦七時間餘にして同十時三十分清兵潰走せり此戦に於て聯合軍の死傷は露兵六百餘日本兵四百餘英兵六十餘にして清兵の死傷は二千餘あり天津を去る三十哩の地に清兵一萬二三千ありて聯合軍北京に前進せば其處に乗じ天津を回復せん計畫あるが如しと云へり

拳匪及清兵は支那街より侵來し中莊の外國居留地の攻撃を開始し約七時間露兵と交戦したりしが露國砲艦二隻より發砲し全く之を市外に驅逐せり砲撃は三時より九時半迄繼續したるも市中の被害は割合に少くして日本商店の如きは一も障りなく露國旗は同夜税關に掲げらるる去る二十五日太沽より當港に來着したるアレキシフ中將は本日列國領事に通告するに露國人及び外國人及び清國人民の爲同地に露國假政廳を開始し從來右人民等が牛莊にて享有したる權利特權は之を侵さざるべき旨を以てせり

八月六日

聯合軍は本日午前楊村に向て運動を起し英米露佛及我歩砲兵若干は白河の左岸より我師團の殘餘は其右岸より行進せり然るに敵は左岸縱隊の戰團部隊の爲脆くも撃退せられたるを以て我右岸部隊は僅に砲兵を以て資抵縣に向ひ退陣せる敵の大縱隊を砲撃するを得たるのみ又右岸縱隊の行進は道路險惡あるが爲行進大に遲滞し僅に楊村に達せし爲全く戰團に參與するを得ざりし昨五日の戰團に於ける將校の死者は木内大尉(歩兵第

- 四十一聯隊(茂上少尉)歩兵第四十一聯隊(小關少尉)同上(西山少尉)同上豫備(井上大尉)歩兵第二十一聯隊(福地大尉)同上中村中尉(同上)西山少尉(同上)片桐少尉(同上)山積中尉(歩兵第四十二聯隊)横山中尉(騎兵第五聯隊)山川少佐(野砲兵第十六聯隊)

記者曰く木内大尉名は末男氏

又聯合軍は北倉の敵に接せる日本兵の援軍に越けり此は去る四日將官會議にて援軍の事を決せしあり敵兵各地に據り地位を固め聯合軍の側面には砲兵を増やし白河の左岸に大砲を据ゑたり李秉衡の部下五千西南より運河の青縣を占領せんとて進軍す哥薩克兵の報告に據れば李秉衡の兵約四千敵の本部に合せりと聯合軍の動かさるに乗じて敵は河上にて示威運動を爲せり敵は二隻のジャンクに大砲兵士を載せて附近の陣營を攻撃せんとし又見せつけに我外營の銃丸到達距離内まで近づき來れり然れども清兵の働さにて退却せしめたり

北倉邊の河は長距離の間石を積みて沈めたる船の爲に塞がり河水氾濫せりされと晴天打撃さて行軍に好都合あり北京より急使の來らざるより察すれば敵の援軍は出發途中にあるあらん

八月七日

昨六日北倉楊村占領詳報左に記さんに聯合軍會議を天津の露軍本營に開きて北京へ前進の件を議せり初めは我山口中將を議長として日本軍本營に開かん豫定ありしも折節露國軍團長リニエウキツチ氏來りしかば俄かに模様替とあり軍團長の議長に由りて開かるることとありたるあり今回進軍の主動は日本軍ありしが之に反對せしは獨逸あり其理由は我輸送中の二旅團兵到着まで進軍を待たんといふに在り次に露國は追々降雨の季節に迫れば進行困難を來すとあふんといふを口實として反對せしも多數を以て進軍するに決し其目的は先づ楊村まで進むこととし次に作戰計畫を左の如く三面攻撃と定めたり

一 佛羅埃獨伊の五國は白河の左岸を進み北倉の側面を衝く事

二 日本軍の一隊は火薬庫を陥れ韓家樹より迂回して北倉の背面を衝く事

三 貝錫旅團長の率ゐる牽制軍は北京街道を直進して北倉の前面を衝く事

斯く計畫并に部署も定まりたるに由り五日午前一時各其舎營地を發して先づ其砲撃を始めしは火薬庫方面に向ひたる塚本旅團の一部隊にして三時過より砲聲聞しも優勢の敵は容易に韓家樹まで前進せり此役眞錫旅團長は自ら二箇大隊を率ゐて前衛となり北京街道を北倉方面に向ふ途中唐家灣に於て敵時間の激戦をさせるが敵は地利を恃みて頑強に抵抗し爲に突貫四回に及び遂に敵を撃退し破竹の勢ひを以て北倉に進行せり初め北倉の敵は白河の水を氾濫せしめ我軍の容易に近づく能はざらしめたり然れども軍偵察の報する所に據り往涉し得るものとして進行を続けたるに實際其氾濫の處は水深くして渉るべからず乃ち此方面の兵は空しく引還し初の作戰計畫は全く齟齬に屬せり

八月八日

北倉占領後聯合軍は北京方面に前進の軍議會を開きしに或一二國の將校は自國後發軍の到着を待たんと議を提出せしむ北倉占領後に於ける敵狀を偵察せしに退散後敵の軍氣全く阻喪したれば再び兵力を集中せざる前に當りて之を追撃したるには現在聯合軍の兵力にて北京を陥落するに十分ありとの説多數にて審議の結果先づ通州まで前進し北京大攻撃の作戰計畫は通州占領後更に軍議會を開かん事に決し十三日を期し通州に進み直ちに同地を占領することとし軍議會出席將校は各自國の軍に歸り決議の要領を軍隊に命令し皆戰闘序列を整へ通州に向ひ追撃の姿勢を以て前進運動を始めしに楊村河西務に於て多少の抵抗ありし外更に抵抗しき事とてはあく豫定期日より一日早く即ち十二日通州に到着し直に同地を占領したるあり此上の軍議會は北京城内の狀況如何に因り決するものあれば豫想するを得ずと雖も凡説の如く清兵再び公使館を攻撃するが如き事あれば軍議會は直に勇往奮進北京大攻撃の作戰計畫を決定し速に其實行を見るに至るものと云ふ

午前七時半北倉の敵守を棄て潰走し聯合軍の占領する所となりしは其實我日本軍獨力の運動にて他の軍隊は與らざりしあり但唐家灣にて四回の突貫を試みたる時は我軍已に彈丸盡きて非常に苦戦せる最中あり幸に密備二軍の掩護隊後方より熾に野戰砲を放ちたる勢ひの凄しかりしに由り敵兵も稍怯みて遂に突貫其功を奏したるあり此日我死傷約三百名にして戦死者は歩兵第四十一聯隊第十中隊長木内大尉外負傷將校十餘名其他京漢新聞社員大野某氏も重傷を負へり敵の死傷數ふ可からず

六日更に進みて楊村を占領す

楊村占領に於ける聯合軍の死傷九十名内五十名は我兵士あり最聯合軍は當分楊村に留りて前進せざるべしと北倉の戦に宋慶、馬玉崑、李秉衡、裕祿、董福祥武衛前鋒陳澤霖皆出陣せり敗北の際裕祿殺さる聯合軍昨夕宋慶の備れる敵の根據地楊村を攻め之を占領せり聯合軍の各團指揮官は勢に乘じ行進を續くべしか將た目下途中に在る各國軍隊の至るを待ちて共に進むべきかに就き協議中あり

八月九日

聯合軍入京するは公使等を救援する爲かり皇帝太后御く莫く都を遷すは可からずと上疏せし由あれど太后初め既に北京を去れりと又西太后續いて皇帝端郡王其他は陝西省西安府に遁れたり護衛兵は團匪六十五名滿州兵三十五名清兵十名の割合ありき董福祥殿りとあり後拒として往くべしとの報あり本日は歩騎砲工の一部隊を以て速かに南蔡村を占領する筈あり

清國は皇帝の名を以て休戦の事を我日本始り列國政府に哀求し來りしに就き我政府は率先列國政府に提議し北京政府をして北京城外迄外國公使を送り出さしめ聯合軍の保護に就かしむる事否とされば列國公使並に聯合軍に抵抗せし團匪官匪を北京城外に退け聯合軍を北京城内に進ませしめ列國公使及び在留民を保護せん事を以てせしに列國は昨夕迄に皆日本の提議に同意し來りしを以て我政府は此條件を以て清國政府に交渉する筈ありと云ふ

本日聯合軍の河西務砲臺の際には董福祥出馬し居たり

保定の方へ逃げたり

天津練軍何統領は右交戦中殞れ馬玉崑の生死不明とあり

聯合軍は北倉を占領して以来懸軍長驅疾風の勢を以て

夫より日本軍を先陣とし露兵英兵及び米兵順々に次

急進し我第五師團は昨十二日通州に於て聯合各軍と

ぎ八月十二日通州に到達する豫定あり

合議の上北京総攻撃の部署を定め今明の両日を以て北

佛國兵は輜重の組織不完全あるが爲め楊村に駐るべし

京城の東面に向つて進發すると云ふなり我が第五師

本日聯合軍は通州方面に向つて進軍の途偵察兵を派遣

とし之れに野戰砲兵十六聯隊の一大隊工兵若干を屬せ

せし處同附近に無数の清兵隱屯し居るを認たりと云ふ

しめ且つ別に騎兵第五聯隊を獨立騎兵として共に本道

通州附近にて聯合軍と清兵と對戦し聯合軍は大勝利を

を前進せしむ亦塚本少將自ら之を率ゐる通州の敵兵を掃

爲し之を占領し米五萬石を捕獲す

攘しつゝ本道の右側を前進し山口師團長福島少將は參

後附によれば各國公使館も昨日及び本日大攻撃を受け

謀官と共に左縱隊となり歩兵四十二聯隊(二十一旅團

八月十二日

記者曰く通州は北京を距る四里許の地に在り

の(一部)野戰砲兵第五聯隊工兵第五大隊を率ゐて眞鍋

尙聞く西太后は北京より西安(陝西?)へ蒙塵し端郡王

少將の先發隊に續いて本道を朝陽門の方面に進み別

は其の總指揮官諸親王は指揮官として團匪を率ゐる供奉

二十一聯隊の一個大隊(隊長佐本少佐)は留つて通州の

せり皇帝は強りて之れに従へり剛毅、董福祥、李秉衡

守備に任じ別に列國聯合軍は露英米の順序にて即ち露

北倉占領後聯合軍は北京方面に前進の軍議會を開きし

軍は日本軍の南方に英米軍は更に露軍の南方に聯絡運

に或一二國の將校は自國後發軍の到着を待たんと議

動を爲す豫定にて共に東便門の方向を目指して進行せ

を提出せしも北倉占領後に於ける敵狀を偵察せしに退

りたり

散後敵の軍氣全く阻喪したれば再び兵力を集中せざる

報あり

前に當りて之を追撃したるには現在聯合軍の兵力に

本日歩騎砲工の一部隊を以て速かに南蔡村を占領す

て北京を陥落するに十分ありとの説多數にて審議の結

果先づ通州まで前進し北京大攻撃の作戰計畫は通州占

領後更に軍議會を開かん事に決し十三日を期し通州に

進み直ちに同地を占領することとし軍議會出席將校

八月九日

は各目國の軍に歸り決議の要領を軍隊に命令し皆戰闘

清國は皇帝の名を以て休戦の事を我日本始り列國政府

序列を整へ通州に向ひ追撃の姿勢を以て前進運動を始

に哀求し來りしに就き我政府は卒先列國政府に提議し

めしに楊村河西務に於て多少の抵抗ありし外更に抵抗

北京政府をして北京城外迄外國公使を送り出さしめ聯

ふしき事としてはあく豫定期日より一日早く即ち十二日

合軍の保護に就かしむる事否とされば列國公使並に聯

通州に到着し直に同地を占領したるあり此上の軍議會

合軍に抵抗せし團匪官匪を北京城外に退け聯合軍を北

は北京城内の状況如何に因り決するものあれば豫想す

京城内に進入せしめ列國公使及び在留民を保護せん事

るを得ずと雖も凡説の如く清兵再び公使館を攻撃する

を以てせしに列國は昨夕迄に皆日本の提議に同意し來

が如き事あれば軍議會は直に勇往奮進北京大攻撃の作

りしを以て我政府は此條件を以て清國政府に交渉する

本日聯合軍の河西務砲撃の際には董福祥出馬し居たり

八月十日

天津練軍何統領は右交戦中殺れ馬玉崑の生死不明

夫より日本軍を先陣とし露兵英兵及び米兵順々に次

ぎ八月十二日通州に到達する豫定あり

佛國兵は輜重の組織不完全あるが爲め楊村に駐るべし

八月十一日

本日聯合軍は通州方面に向つて進軍の途偵察兵を派遣せし處同附近に無数の清兵隠屯し居るを認たりと云ふ

八月十二日

通州附近にて聯合軍と清兵と對戦し聯合軍は大勝利を爲し之を占領し米五萬石を捕獲す

後聞によれば各國公使館も昨日及び本日大攻撃を受けたり

記者曰く通州は北京を距る四里許の地に在り

尙聞く西太后は北京より西安(陝西)へ蒙塵し端郡王

は其の總指揮官諸親王は指揮官として團匪を率ゐ供奉せり皇帝は強られて之れに従へり剛毅、董福祥、李秉衡

八月十四日

北京總攻撃の實況

◎露兵の拔驅運動

斯て聯合軍は十四日に各々城門の方面に陣地を定め、十五日の拂曉を以て我が軍より戦闘を開始するの約束ありしに十三日通州を出發したる其夜の十一時頃露國兵等の向ひたる東便門の方に當りて突然猛烈なる銃聲の起りしかば我が軍が旅團司令部に於ては何事ありんと直ちに斥候を出して之を確めしめたり然るに一隊の露軍は意外にも敵と交戦しつゝありしかば我軍其の所以を詰りしに露國は辨解して曰く敢て北京の本攻撃にあらず唯威力偵察を以て敵の動靜を試みたるまでありと蓋し露軍は北京攻撃を以て通州の如く容易に陥落すべしと云ふし聯合軍合議の約束に依らず拔驅の功名を博さんと云ふに茲に單獨運動を試みたりしあり然るに其の結果却て激烈なる敵の反抗を受けて苦戦し爲めに其の聯隊長は戦死し參謀長亦重傷を蒙り事態甚だ危険とあり交戦容易に解けず翌十四日の朝に至り遂に我軍に向つて援助

は保定の方へ逃げたり

八月十三日

聯合軍は北倉を占領して以來懸軍長驅疾風の勢を以て急進し我第五師團は昨十二日通州に於て聯合各國軍と合議の上北京總攻撃の部署を定め今明の両日を以て北京城の東面に向つて進發するとありたり我が第五師團は眞鍋少將の第九旅團(十一聯隊四十二聯隊)を先鋒とし之れに野戰砲兵十六聯隊の一大隊工兵若干を屬せしめ且つ別に騎兵第五聯隊を獨立騎兵として共に本道を前進せしむ亦塚本少將自ら之を率ゐ通州の敵兵を掃蕩しつゝ本道の右側を前進し山口師團長福島少將は參謀官と共に左縱隊となり歩兵四十二聯隊(二十一旅團の一部)野戰砲兵第五聯隊工兵第五大隊を率ゐて眞鍋少將の先鋒隊に續いて本道を朝陽門の方面に進み別隊二十一聯隊の一個大隊(隊長佐本少佐)は留つて通州の守備に任じ別隊列國聯合軍は露英米の順序にて即ち露軍は日本軍の南方に英米軍は更に露軍の南方に聯絡運動を爲す豫定にて共に東便門の方向を目指して進行せり

を求むるの已むを得ざるに至れり是に於て我軍は開戦の期を繰上げ十四日午前六時より七時までの間に咄嗟運動を起すの手筈を定めたり

◎我軍の前衛朝陽門の迫る

是より先我が軍は十三日午前六時先鋒第九旅團は歩兵第十一聯隊を前衛とし同日十時頃大王庄に着し尙其聯隊より数多の將校斥候を出したるに北京城壁に近く進むに及んで途中敵の狙撃を受け即死したるもの若干名ありし而して城内にては義和團匪の太鼓を叩きあせして兵威を示すものありたり尋で四十一聯隊も亦前衛に次で前進せしが意外なる露國の拔驅運動を目撃せしかば翌十四日午前二時半眞鍋旅團長は其の第九旅團に對して何時にても直ちに前進し得る様準備し置くべき旨の命令を下したり程なく通州に在りし山口師團長よりも又騎兵本隊は北京の西方及び西北方に運動を起し亦第九旅團は師團長の到着に先んじ必要に應じて北京に入るべしとの命令ありたり

斯かる事情を以て我軍は豫定の時間を繰上げ本日午前四時四十五分大王庄を發し今回は四十一聯隊を前衛と

あし十一聯隊は前衛本隊とあり兵氣肅々朝陽門に向ひたり曉色は此日の快晴を示して行進の光景又一層の偉觀を呈しぬ而して二十一旅團は師團司令部と共に同じく本日午前三時通州を出發し途中一回の休憩をもあさず勇を鼓して前進し四十二聯隊は師團の本隊とありて朝陽門外千二百米突の地に陣し更に塚本旅團長は二十一聯隊の全部と若干を率ひ其より右折して東直門に向ひぬ

◎朝陽門外の激戦

第九師團の前衛たる四十二聯隊が朝陽門外に於ける紅橋(石橋)に達したるは午前六時十分頃ありしが當時騎兵の偵察に依れば敵は城門より城壁に沿つて防禦線を張りし事ありしかば同聯隊は一方に砲兵陣地を布き更に前進したるに敵は城壁に據りて猛烈なる射撃を開始したり依て我兵は道を狭みたる兩側の人家を掩屏として城門に近く迫りしが見上れば城壁高く空に聳へて之を攀ぢ登らんと思ひも依らず殊に城門の装置は最も堅固にして其正面には亦壁壘あり敵兵此所に守據して銃丸を亂射し以て城門前に行進せる我が軍隊の背後

を襲はんとす若城門容易に破れざらんか門外に銃ひ集れる兵士は恰も井中に陥りたる頂上より矢石を蒙ると一般にして其危険は實に名状すべからざる者ありし斯くて四十一聯隊の朝陽門外に着するや尖兵として矢崎少尉は第一中隊の一小隊南山大尉は第十中隊を率ひて城門に進入せんとせしが入ること能はず尋で佐伯中佐(惟孝)前衛一個大隊を率ひ工兵の前衛として爆裂薬装置に着手したりしも亦た遂に目的を達すること能はざりし蓋し敵は盛んに城壁の銃眼より射撃を加へ銃丸爲めに敵の如く皆我軍の頭上に落下し來りぬ此際我將校士卒の動作は頗る勇敢にして猛進死を恐れざりしも工兵が爆裂薬の装置に従事する間に死傷者を生ずると意外に多く如何に焦慮するも其の装置を全ふすこと能はざりしあり茲に於て山口師團長は砲兵隊に命じ城壁上の敵を撃たしめたり依て砲兵第五聯隊長永田大佐(龜)は朝陽門外約千五百米突の高臺にありし砲兵陣地を指揮し全砲兵を展開して十八門の野砲と三十六門の山砲とを以て砲撃を開始せしめたり以上の砲門は間斷なく發射せられ其の聲轟々として天地を震撼し壯快實に言

語に絶せり時に午前九時四十分

◎城門破壊 (爆裂の装置)

茲に於て小原旅團長は此の困難の事情を上官に報告したるに山口師團長より白晝にては工兵の動作自由さざるを以て今夜九時十時の間を期し暗に乗じて爆裂すべしとの命令下りしかば城門破壊の舉は一時見合したるも砲撃は依然として晩景まで之を續けたり蓋し我軍が此の如く困難を冒し危険を顧す不利益の地點に在りて多くの損害を蒙りつゝ無二城門の破壊を急ぎしもの其理由をくればあらす北京進軍本来の目的は公使館の救護にあり敵兵聯合軍の大舉して城壁に迫るを知るや同時に城内の公使館は必ず最後の火槍を蒙らん故に聯合軍は兵を進むると同時に電報して城内に進入し敵が狼狽の間に乘じて急速公使館の救護を爲さるべからず倘し城門の破壊に荏苒して時刻を移さば公使等の運命亦知る可からず是を以て一旦開始せし砲撃は事情の如何に拘らず之を連續せしめ敵をして暫くも其の後背を顧るの餘地を期したりしあり既にして日は暮れたり朝陽門破壊の命は工兵第二中隊に下れり中隊長土屋大尉(善龜)は之が指揮官として田

坂少尉(八九郎)外七名を第一門に杉本伍長(周二)外七名を第二門に當らしめ敵の注目を避けんが爲め一同は裸體となりて準備し午後九時に至り火薬の装置に着手せり時に月輪蒼空に顯はれしも宵に降雨ありて陰雲俄かに天を蔽ひ四面全く暗黒となりしかば一同は此の機に乗じて裸體の儘敏速に城門前に進みたり然るに敵は早くも之を曉りけん猛烈なる射撃を以て工兵の頭上を掩撃せしが工兵之に屈せしめて首尾よく火薬を装置し九時三十五分第一門を破壊し次で直ちに第二門に至り以て之を爆裂せしめぬ

城門既に破壊したりしかば四十一聯隊第一大隊は佐伯少佐之を率ひ第二大隊は小倉少佐第三大隊は井上少佐各々之を率ひて順次に突貫し第一第二の大隊は飛兵を驅逐しつゝ直ちに我が公使館に向つて進軍し第三大隊は北に折れて東直門の攻撃を助けたりされど東直門も亦此時既に破れたりしかば引回へして直ちに朝陽門内の倉庫を占領せり

◎東直門外の戦闘

先山口師團長は身鎧旅團長、福島少將と共に

語に絶せり時に午前九時四十分

斯の如く我が砲兵は朝陽門の北其の南ある敵の砲兵陣地向つて盛んに砲撃せしに城壁上の敵は砲撃中或は隠れ砲聲息むときは又顯はれ城門を破らんとする我兵に對し頑固ある抵抗を爲せり左れば尖兵として先登に進みし南山大尉も矢崎少尉も敵の砲射に下にありて容易に引揚ぐるを得ざりしが斯くては我が砲撃は味方を傷ぐるの懸念あるを以て一先づ退却するの已むを得ざるに至れり時に午前十一時ありし

既にして砲撃は再び城門に向つて開かれたりされども城門の構造は巴字形を爲し城壁にて掩はるゝが故に砲撃も又其の効をかりし但し此の砲撃は午前九時より午後四時まで繼續せしとされば流石に堅固ある朝陽門の構は潰され城壁の銃眼も所々破壊したれども城門の構造堅固ある上敵兵亦案外に多く此所を先途と應戦に努め我工兵進んで破壊せんとするや敵は銃丸を雨の如く亂射し來るを以て又如何ともすると能はざりし矢崎少尉が敵の弾丸に中りて名譽の戦死を遂げしは實に此所ありし

敵前四百米突の市街に止まりて諸部隊を指揮し居たりしが塚本少將の右縦隊を東直門に向はしむると同時に池田砲兵少佐(綱平)の率ゐる砲兵第五聯隊第一大隊の陣地を右側に移して東直門の方向、敵前一千米突の距離より盛んに砲撃をささしめたるに敵も屈せず三十五六門の新臼砲と擡槍銃を以て正面の櫓と左右の城壁より猛烈に應戦し聯合軍も亦同時に東便門方面に砲火を開きたりされば敵味方の大砲百數十門の硝煙は騰々として天を蔽ひ其の響は宛かゝ百雷の一時に鳴りはためくが如く天地も碎けんかと異しまるゝばかりありし此間我砲兵隊の打出したる弾丸は實に四千五六百發ありしと言へば其すさまじき有様は察するに餘りあるべし而して東直門に向ひたる第二十一聯隊は城門を破壊して直ちに進入せんとあせしも其の要害は朝陽門と同じく頗る堅固にして之を破るには亦工兵の手を借らざるべからず依て午前十一時師團長は工兵第三中隊長井上大尉(幾太郎)に命じ竹中二十一聯隊長(安太郎)指揮の下に東直門破壊の任務を授けぬ茲に於て工兵隊は歩兵第十八中隊と共に其門を距る三百米突の獨立家屋に達

◎城門破壊 (爆薬の装置)

茲に於て小原聯隊長は此の困難の事情を上官に報告したるに山口師團長より自費にては工兵の動作自由をざるを以て今夜九時十時の間を期し暗に乗じて爆裂すべしとの命令下りしかば城門破壊の舉は一時見合したるも砲撃は依然として晩景まで之を續けたり蓋し我軍が此の如く困難を冒し危険を顧す不利益の地點に在りて多くの損害を蒙りつゝ進二無二城門の破壊を急ぎしもの其理由をくればあらす北京進軍本來の目的は公使館の救護にあり敵兵聯合軍の大舉して城壁に迫るを知るや同時に城内の公使館は必ず最後の掩撃を蒙らん故に聯合軍は兵を進むると同時に電撃して城内に進入し敵が狼狽の間に乗じて急速公使館の救護を爲さるべからず倘し城門の破壊に荏苒して時刻を移さば公使等の運命亦知る可かす是を以て一旦開始せし砲撃は事情の如何に拘らず之を連續せしめ敵をして暫くも其の後背を顧るの餘地を期したりしあり既にして日は暮れたり朝陽門破壊の命は工兵第二中隊に下れり中隊長土屋大尉(善徳)は之が指揮官として田

坂少尉(八九郎)外七名を第一門に杉本伍長(周二)外七名を第二門に當らしめ敵の注目を避けんが爲め一同は裸體となりて準備し午後九時に至り火薬の装置に着手せり時に月輪蒼空に顯はれしも宵に降雨ありて陰雲俄かに天を蔽ひ四面全く暗黒となりしかば一同は此の機に乗じて裸體の儘敏速に城門前に進みたり然るに敵は早も之を曉りけん猛烈なる射撃を以て工兵の頭上を掩撃せしが工兵之に屈せずして首尾よく火薬を装置し九時三十五分第一門を破壊し次で直ちに第二門に至り以て之を爆裂せしめぬ

城門既に破壊したりしかば四十一聯隊第一大隊は佐伯少佐之を率ゐる第二大隊は小倉少佐第三大隊は井上少佐各々之を率ゐて順次に突貫し第一第二の大隊は殘兵を驅逐しつゝ直ちに我が公使館に向つて進軍し第三大隊は北に折れて東直門の攻撃を助けたりされど東直門も亦此時既に破れたりしかば引回へして直ちに朝陽門内の倉庫を占領せり

◎東直門外の戦闘

先山口師團長は眞鍮旗團長、福島少將と共に

したるが目指す東直門は勿論朝陽門に至る城壁に沿ふて多くの敵兵守據し我工兵に向ひ猛烈なる射撃を以て其の前進を阻まんとして我が砲兵地より東直門附近の敵に向ひ盛んに砲撃したるに敵は遂に支ふる能はず城壁上より逃げ去りたり茲に於て工兵隊は機失ふべからずとあし城門に進んで之を破壊せんとしたりしも敵兵再び壁上に顯はれ來り而かも其勢以前に倍し我兵を瞰視して之を狙撃せしかば到底一步も進む能はず依て暫く工兵歩兵の動作を止め唯其砲撃を以て敵を聯せたり

既にして山口師團長より命令あり今夜九時十分の間に東直門を破壊すべしと依て井上中隊長は其の第一門を池田伍長(榮助)外十名に第二門を村山小尉(壽門)外九名に各々破壊すべきの任務を授けたり此の時中隊長以下何れも外套を着し(軍服は白色あるを以て敵の眼に着き易く故に外套を着して之を蔽へり)先鋒は第一門破壊次は井上中隊長の率ゐる掩護兵亦第二門破壊隊は之に次ぎ密かに前進せしに途中敵の射撃を受けられども八時五十五分三十分黄色火薬を用ゐる爆寸を點して咄

敵前四百米突の市街に止まりて諸部隊を指揮し居たりしが塚本少將の右縦隊を東直門に向はしむると同時に池田砲兵少佐(綱平)の率ゐる砲兵第五聯隊第一大隊の陣地を右側に移して東直門の方向、敵前一千米突の距離より盛んに砲撃をさしめたるに敵も屈せず三十五六門の新臼砲と舊臼砲を以て正面の橋と左右の城壁より猛烈に應戦し聯合軍も亦同時に東便門方面に砲火を開きたりされば敵味方の大砲百數十門の硝煙は朦々として天を蔽ひ其の響は宛がふ百雷の一時に鳴りはためくが如く天地も砕けんかと異しまるゝばかりありし此間我砲兵隊の打出したる彈丸は實に四千五六百發ありしと言へば其すさまじき有様は察するに餘りあるべし而して東直門に向ひたる第二十一聯隊は城門を破壊して直ちに進入せんとあせしも其の要害は朝陽門と同じく頗る堅固にして之を破るには亦工兵の手を借らざるべからず依て午前十一時師團長は王兵第三中隊長井上大尉(幾太郎)に命じ竹中二十一聯隊長(安太郎)指揮の下に東直門破壊の任務を授けぬ茲に於て工兵隊は歩兵第十八中隊と共に其門を距る三百米突の獨立家屋に達

嗟の間に第一門を爆發せしめ次で第二門を爆裂したるは九時二十分ありし

◎二十一聯隊の突貫 (死傷九十餘名)

斯の如くにして二門共に破壊されたれども城門は我歩兵の所在地を距ると遠く當時尙は敵の銃聲熾なりしかば我歩兵は工兵の城門を破壊したる事を知らず依て喇叭卒は銃聲に紛れざらんが爲め殊更に君が代を吹奏し城外にある歩兵に對して合圖をあしたれども其の甲斐あかりし此に於て傳令使を發して之を通報したり此間敵は絶えず壁上より射撃し又煉瓦と銀塊とを投げつけたり

暫くにして第二十一聯隊は隊伍整然として城内に突貫せり然れども城門の窄さが爲めに全隊の動作は頗る自由ならず敵は城壁の上より益々盛に射撃し我兵は爰に九十名の死傷を生じ非常の苦戦をあしたりしか敵も亦甚だしき損害を蒙りけん數百の死骸と七十餘門の大砲とを遺して潰走せり

八月十五日

北京占領

◎師團本隊の進入

拂曉味方の大軍が朝陽東直二門を破壊して城内に進入せし後師團長山口中將以下各將校は朝陽門の壁に登り此所にて朝食を喫し城内に進入せり是より先き師團長は其の聯隊を第九旅團に屬せしめ一個大隊を師團の總豫備として殘し置き殘部一個大隊半を渡邊大佐に率ゐしめ以て皇城の東安、西安、泰神、北安の四門を保護するの任務を命じたり

斯くて渡邊大佐は師團長より皇城の各門保護の任務を受けて黎明皇城に向つて前進せしが皇城内には多數の敵兵ありて單に一個中隊づつを以て各門の守備に當るは頗る困難の事情ありしかば已むなく隊の全部を東安門に向つて前進せり隊は此の進行中敵の少數ある歩哨に會して之を擊退し夫れより先鋒は散兵を布き以て東安門の敵と應戦せり然るに最初の命令は成るべく皇城に向つて射撃すると勿れその事ありしを以て東安門に向はざる方向に於て散兵を布き敵に接近しつゝ拂曉に

至り再び尖兵小隊を散兵として其他の諸隊之に次ぎ東安門附近の門扉城壁に近づき以て其の門を破らんとしたるに敵は三面より射撃せしかば我兵一齊喊聲を揚げて門を排し其の一部隊は突貫して前進したり然るに堀を隔つ三百米突の距離より敵兵再び射撃し門外に留まれる大部隊も亦道路の兩端より射撃を受けて苦戦し二十餘名の負傷者を生じ渡邊聯隊長亦右足に負傷す我兵之に抵抗するに便ならずしかば射撃を中止し砲兵隊の来るを待てり折柄第四十一聯隊の第一大隊は第二十一聯隊の一大隊及び野戰砲一大隊と共に應援として驅付たれば午後漸くにして皇城内の敵を掃蕩し拘禁され居たりし基督教信徒を救ひて全く日本軍の手に皇城を占領したり此時東便門並びに崇文門より來りたる列國軍の一部は公使館に他の一部は正陽門太清門より皇城内に攻入り佛國兵は素早く其國旗を樹てたるも眞先に日本軍の占領せんとを目撃せる英米國兩軍共に故障を唱へ之に代へて更らに我國旗を宮城に押樹てたり

◎東便門の戦況(公使館との連絡)

第九旅團の本隊十一聯隊が朝陽門外に達したるは十四

嗟の間に第一門を爆發せしめ次で第二門を爆發したるは九時二十分ありし

◎二十一聯隊の突貫

(死傷九十餘名)

斯の如くにして二門共に破壊されたれども城門は我歩兵の所在地を距ると遠く當時尙は敵の銃聲熾なりしかば我歩兵は工兵の城門を破壊したる事を知らず依て喇叭卒は銃聲に紛れざらんが爲め殊更に君が代を吹奏し城外にある歩兵に對して合圖を志したれども其の甲斐あかりし此に於て傳令使を發して之を通報したり此間敵は絶えず壁上より射撃し又煉瓦と銀塊とを投げつけたり

暫くにして第二十一聯隊は隊伍整然として城内に突貫せり然れども城門の窄さが爲めに全隊の動作は頗る自由ならず敵は城壁の上より益々盛に射撃し我兵は爰に九十名の死傷者を生じ非常の苦戦を志したりしが敵も亦甚だしき損害を蒙りけん數百の死骸と七十餘門の大砲とを遺して潰走せり

八月十五日

したるは目指す東直門は勿論朝陽門に至る城壁に沿ふて多くの敵兵守據し我工兵に向ひ猛烈なる射撃を志し以て其の前進を阻まんとす依て我が砲兵地より東直門附近の敵に向ひ盛んに砲撃したるに敵は遂に支ふる能はず城壁上より逃げ去りたり茲に於て工兵隊は機失ふべからずとすし城門に進んで之を破壊せんとしたりしも敵兵再び壁上に顯はれ來り而かも其勢以前に倍し我兵を瞰視して之を狙撃せしかば到底一步も進む能はず依て暫く工兵歩兵の動作を止め唯其砲撃を以て敵を膠ましたり

既にして山口師團長より命令あり今夜九時十分の間に東直門を破壊すべしと依て井上中隊長は其の第一門を池田伍長(榮助)外十名に第二門を村山小尉(壽門)外九名に各々破壊すべきの任務を授けたり此の時中隊長以下何れも外套を着し(軍服は白色あるを以て敵の眼に着さ易く故に外套を着して之を蔽へり)先鋒は第一門破壊次は井上中隊長の率ゆる掩護兵亦第二門破壊隊は之に次ぎ密かに前進せしに途中敵の射撃を受けられども八時五十五分三十黄色火薬を用る燐寸を點して咄

北京占領

◎師團本隊の進入

拂曉味方の大軍が朝陽東直二門を破壊して城内に進入せし後師團長山口中將以下各將校は朝陽門の壁に登り此所にて朝餐を喫じ城内に進入せり是より先き師團長は其の聯隊を第九旅團に屬せしめ一個大隊を師團の總隊備として殘し置き殘部一個大隊半を渡邊大佐に率ゐしめ以て皇城の東安、西安、泰神、北安の四門を保護するの任務を命じたり

斯くて渡邊大佐は師團長より皇城の各門保護の任務を受けて黎明皇城に向つて前進せしが皇城内には多數の敵兵ありて單に一個中隊づゝを以て各門の守備に當るは頗る困難の事情ありしかば己むあく隊の全部を東安門に向つて前進せり隊は此の進行中敵の少數ある歩哨に會して之を擊退し夫れより先鋒は散兵を布き以て東安門の敵と應戦せり然るに最初の命令は成るべく皇城に向つて射撃すると勿れとの事ありしを以て東安門に向はざる方向に於て散兵を布き敵に接近しつゝ拂曉に

至り再び尖兵小隊を散兵として其他の諸隊之に次ぎ東安門附近の門扉城壁に近づき以て其の門を破らんとしたるに敵は三面より射撃せしかば我兵一齊喊聲を揚げて門を排し其の一部隊は突貫して前進したり然るに堀を隔つて三百米突の距離より敵兵再び射撃し門外に留まれる大部隊も亦道路の兩端より射撃を受けて苦戦し二十餘名の負傷者を生じ渡邊聯隊長亦右足に負傷す我兵之に抵抗するに便ならざりしかば射撃を中止し他兵隊の來るを待てり折柄第四十一聯隊の第一大隊は第二十一聯隊の一大隊及び野戰砲一大隊と共に應援として驅付たれば午後漸くにして皇城内の敵を掃蕩し拘禁され居たりし基督教信徒を救ひて全く日本軍の手に皇城を占領したり此時東便門並びに崇文門より來りたる列國軍の一部は公使館に他の一部は正陽門太清門より皇城内に攻入り佛國兵は素早く其國旗を樹てたるも眞先に日本軍の占領せるを目標せる英米國兩軍共に故障を唱へ之に代へて更々に我國旗を宮城に挿樹てたり

◎東便門の戦況(公使館との連絡)

第九旅團の本隊十一聯隊が朝陽門外に達したるは十四時午後八時五十分ありし

然るに是より先早くも居留地に達したるは印度兵あり印度兵は豫て居留地に達すべき道を暗知したりと見ゆ聯合軍が正面より北京城を攻撃しつゝありし間に少數の印度兵は御河の水門を潜りて首尾よく英國公使館に達せり而して其隊は英公使館と日本公使館との中間に穿たれたる一條の空壕にして長く城壁に通じ城壁の下には亦其流を通ずべき少許の間隙ありしかば印度兵は即ち此所より潜入し壕内を俛りて遂に目的を達したるありと我兵及び露兵の公使館に達するや我居留官民は勿論各國の居留外人等一同歡喜の状は言語に盡し難く前後六十日の亦きに亘つて籠城し全く死地に陥りし事とて元氣の旺盛ありしに似ず何れも顔色憔悴して形容頗る慘憺を極め居たりぬ以て數十日に亘る防戦の苦と食物の給養足らざりしを想ひ遣るべし

◎聯合軍の死傷

北京城攻撃以來前後三日に亘れる戦闘に於て我日本軍の死傷者は下士卒二百餘名其の將校にて戦死及負傷せし者左の如し

日の午前八時過ありしが四十一聯隊が將に烈しく敵に迫りつゝありし時あり聯隊長はまづ村山少佐をして第三大隊を率ゐて朝陽門の味方に應援せしめしが既にして露軍は東便門を破壊せしとの報ありしかば取敢てす其大隊に命ずるに東便門より公使館に進むの任務を以てし其儘進發せしめたるに東便門破れたりとは虚報にして同大隊は引返し來れり然るに午後六時前に當り再び東便門破れたりとの報あり今度は響の第三大隊に第一大隊を加へ粟谷聯隊長之を率ゐて福島少將と共に進みたるが同門は果して既に破れ居たるを以て露軍に次で同門より突進せり斯くて我二個大隊は東便門を経堀に沿ひて崇文門に到れるに門は全く閉ぢて押せども開かず然るに門と地上との間に一尺許の門隙あり林大尉輕便電燈を携へ頭を突入れて伺ひ見るに門は一枚板にして然かも此邊には敵兵の隻影あかりしを以て歩兵十名許を率ゐて其門下より這入り更に門樓に登りて見るに此門は輻輳にて繰り上ぐるの装置ありしかば即ち歩兵十名餘にて馬の通行に差支なき迄に繰上げ我兵先頭とありて進行し露兵之に次ぎ以て公使館に達せり

戦死者

少尉 矢崎豫作

歩兵第四十一聯隊

大佐 渡邊 章

歩兵第四十二聯隊々長

中尉 尾寺藤三

同

中尉 吾妻正彦

同

少尉 飯田信平(?)

歩兵二十一聯隊中隊長

大尉 富田七郎

同

大尉 道家次郎

同

少尉 竹内榮喜

◎占領後の荒廢

(占領區域の秩序回復)

聯合軍が北京城攻撃に先づ二日支那の皇室大臣等は董福祥の兵三千人に説かれて西安府指して落行さしとの事あるが陥落の當時城内の民も多くは逃去り其の残れる者は無頼の暴民にして戦亂に乗じて掠奪を恣にするが故に兵火に燬されたる殘餘の家屋は悉く荒廢して目も當ふれぬ有様ありしが十六日端郡王邸宅を燒却

すると同時に各國軍協議の結果朝陽門より府城に一直線を劃して其北部を日本軍に亦正陽門を中心として露佛は其東部を英米は其西部を各自整理區域とせし民政廳を設けて亂後の荒廢に對し諸般の整理に努め砲兵中佐柴五郎氏を以て之れが長官とせし日本軍は其の整理區域内各所に守備兵を置き大部分は定門外に宿營し師團司令部は公使館内に置けり

◎分捕品其他

北京に於ける我軍の分捕品はシリング砲五門、舊式砲百門、槍銃彈藥軍器等無數、馬蹄銀二百五十萬兩、玄米二萬石等ありしと



明治三十三年九月十日印刷
明治三十三年九月十五日發行

岡山縣備前國邑久郡國府村字破上
百二十四番邸平民
現住所兵庫縣神戸市雲井通二丁目
千六百十二番屋敷千四百七十三

發行人 水田 靜也

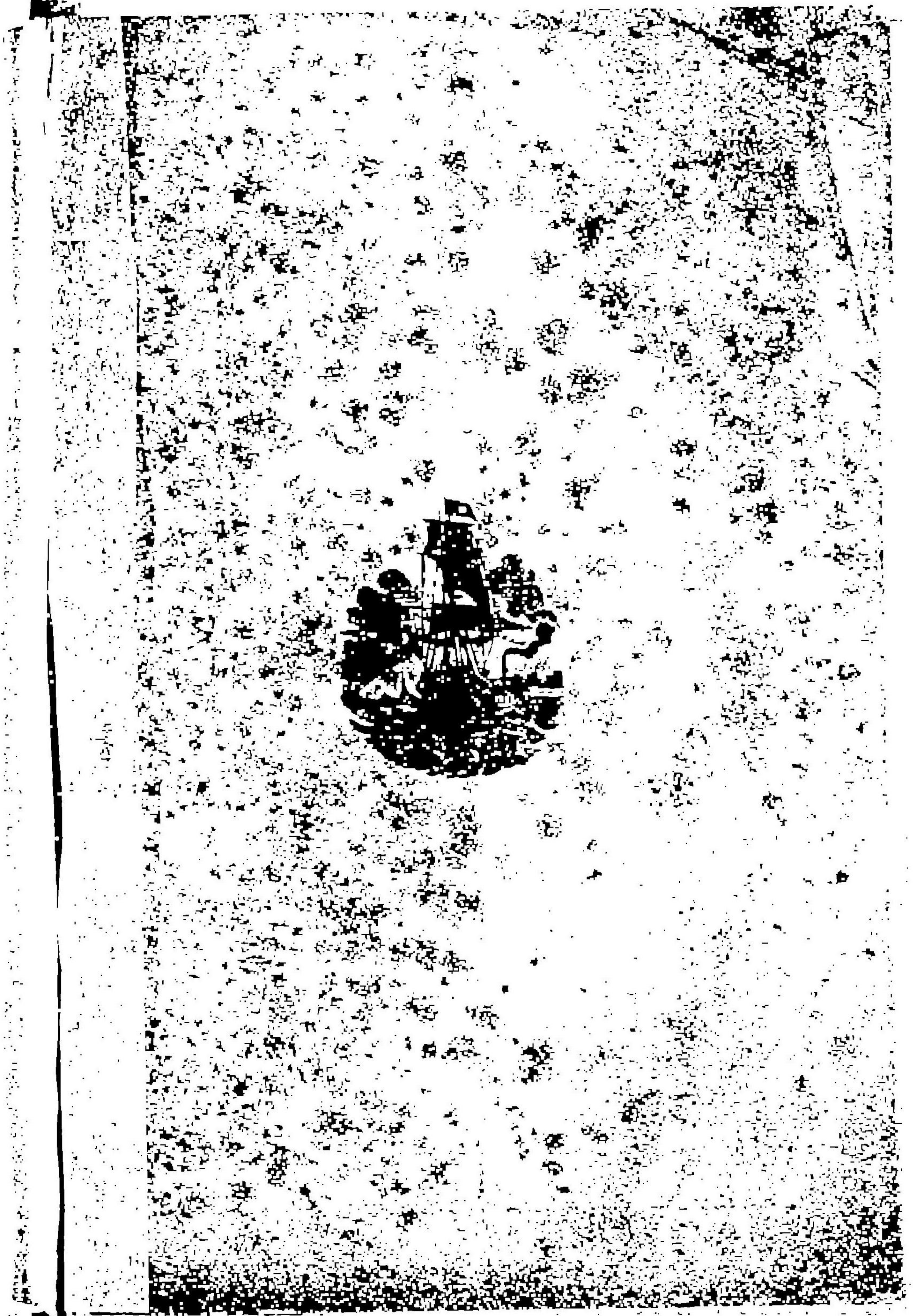
岡山縣美作國英田郡栗廣村大字田段
現住所兵庫縣神戸市雲井通二丁目
千六百十二番屋敷千四百七十三

著者 杉本 殖

印刷所 神戸開國堂

兵庫縣神戸市雲井通二丁目
千六百十二番屋敷ノ千四百七十三

發行所 三盟館



1/12/81
JIT

清国擾乱日記
国立国会図書館

特51
172

禁
復
写

003226-000-2

特51-172

清国擾乱日記

杉本 殖/著

M33

ACC-1500

